
天と地の境界線

虹乃 咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天と地の境界線

【Nコード】

N0801P

【作者名】

虹乃 咲

【あらすじ】

兄が異世界に行ってきた。
百歩譲って認めるとしよう。
ただどなんで私まで連れてこれなきゃならないの？
かなりシリアス、時々コメディ、甘甘。
異世界で奮闘する女子高生のお話である
愛と平和の物語…です？

ブログ（１）（前書き）

初投稿（直しまくり）です
未永くお付き合い下さい

プロローグ（１）

冬のような寒さが続く秋が始まった。色づいた葉はまだ秋が始まったというばかりなのに、ひらひらと葉を落としている。まるで命の灯が消えるようだと言っていた。

ひやりとした寒さが窓の隙間から入り込む。

朝日を浴びて椎名蛭子は自然と目を覚ました。低血圧でもない蛭子は目をぱちつと開けると直ぐに身体を起こした。身体がふらつくこともなかったため今日は気分が良いと感じた。

「ん、気持ちいい。何だか今日はいいいことがありそう」

ベッドの上で伸びをしながら、もそもそと起きだし、朝食を摂りに階段を下りて行った。

まさか、その期待がものの数時間で打ち碎かれるとは知らずに・・・。

+ + +

おい俺、異世界に行ってきたんだ。なんか、古いオルゴールを誠
に、あ、誠は俺の友達なんだけど。そしたら、突然それが光って気
づいたら異世界にいたんだ。

早朝と呼べる朝の8時過ぎ、いきなり兄が何の連絡もせずに帰省
してきたと思ったら帰ってきた途端、矢次に話し始めた。

土曜の朝とあって共働きの両親は先ほど起きた。寝起きというの
に関わらず、蛭子の兄、椎名太陽しいなたいようの朝にしてはテンションが高い、
声もでかい、しかも奇天烈な話を聞いて2人は眼を大きく見開いた。
平日の疲れのせい、眼が血走っている。間近で見るのは恐ろし
いと蛭子は思ったが黙って朝ごはんを口の中にいれる。

太陽の話を聞いて椎名家の人々はあきれ返った。

夢でも見たの、学校辛いのか、様々な言葉が頭を過《よぎ》った
が、とうとう頭がいかれた、で家族のみんなの意見が一致した。

「そんでな、国王のフレゼリクの右腕として働いてんだ。ああ、ル
ークって言う軍の司令官に毎日稽古つけてもらってて、すっげー楽
しいんだ」

「兄さん、順を追って話そうか」

雑誌から顔を上げることなく聞き返した蛍子はちらりと冷たい視線を兄の太陽に向けた。

「だから、異世界に行ってきたんだって」

「それは、もう聞いた。私が言ってるのはどうして異世界に行けたのかってこと」

まだ9時だというのに両親は普段2人で行きやしない買い物にそくさと出かけて行った。しつかりと蛍子に置手紙ならぬ置言葉「久しぶりにお兄ちゃんが帰って来たんだから、いっぱい話してなさい」と言っ出て出かけてしまった。

もちろん蛍子は普段は嫌な荷物持ちとしてついて行くとした。だが「蛍子の好きなモンブランケーキ買ってくるから」と母に言われ、泣く泣く兄の相手をしている。

そして待つこと5分、兄の口は開いたり閉じたりするものの、そこから言葉は発せられなかった。

「やっぱり壮大な夢物語？夢は寝ている時に見るものよ」

「ちつがあーう！本当なんだって。見てみるよ、この腹の傷。まじな真剣で切られたんだっての」

服をがばとまくりあげると引き締まった腹筋が見え、脇腹から臍の下まではつきりとした線が見えた。

まじな真剣ってなんだろう、と思いながらも蛍子はその傷を凝視した。

傷は浅いが荒い糸の通し方である。まず普通の病院ではこのぐらの傷ならばもっと綺麗な接合ができるだろう。糸目があちらこちらへと向いており、引き締まった筋肉とはつり合わない雰囲気を出していた。

「自分で縫ったの？ 素人にも程があるわね」

「無理だったの。同じ仲間のペインってのが化膿しちゃまずいからって縫ってくれたんだよ」

「あら、友達は慎重に選ぶべきよ」

命にかかわらない傷だと分かり、辛辣に言い返す。

「なあ、俺が異世界に行ってきたのって信じてる？」

いつもより真面目な声を出すので、その言葉に反応するように顔を太陽に向けた。視線が絡み合った。太陽の瞳は蛍子の驚いた顔を映し出している。

—— ああ、本当なんだ。

兄の瞳をみて確信する。真摯な瞳が蛍子を貫いた。いつもは不真面目な太陽が時折見せる真剣な顔、この表情をしている時はいつも正しい。

昔からそれに助けられていたのを思い出す。

しかし兄と久しぶりに向き合っている恥ずかしさもあつてすぐに顔を雑誌にもどした。

「8割だけ」

「あとの2割はどうなってますの」

太陽が信じてくれた蛍子に女口調で尋ねる。

「あのね、もし何にも取り柄が無い一般人が異世界行ってきたって言ったら即あんた頭腐ってんじゃない、精神科行ってきたほうがいいよ、でしょ」

さりげなく、いや、さりげなさの欠片も無く酷いことを言っているのだが太陽は全く気付いていなかった。それどころかふむふむと頷いている。

「どうして、兄さんは異世界とやらに行けたの。なんか重大な使命でも担ってたの？」

「うーん、使命って言うのか、そうしなきゃいけないって言うか」

どうにも歯切れが悪い。

「異世界で何をしているの」

「有翼人^{うよくじん}と戦っているんだ」

太陽曰く、

太陽がいる世界では地上に住む人間と空の上に住んでいる有翼人がある。

有翼人とはヒトであって人間ではない存在だ。彼らには人間には決して持ちえない翼が背から生えている。

この両者は遥か昔から争ってきいてた。だが、空を自由に飛び回り魔法をも使える有翼人に人間は幾度も敗北を味わってきた。

その上、有翼人は雲の上に住んでいる。天を覆う雲はあらゆる生物の命の源といえる太陽を隠し、地上の作物を育たなくさせている。地上の人々は飢えているのだ。

そのため太陽を奪う戦いが生まれた。

有翼人の王であり太陽の象徴である女帝アイリーンと、幾人の王から成り立っている地の代表であった先帝を引き継いだフレゼリクとの早5年の戦いが続いていた。

突然現れた太陽は最初有翼人の仲間だと思われ、しばらく牢屋に閉じ込められていたが、ようやく誤解が解け、フレゼリクという国王の傍で活躍しているらしい。

「牢屋ですって」

眉を顰めた蛍子に太陽は安心させるように蛍子の頭をぐしゃぐしゃとかき乱した。ぼさぼさとなった髪を手で梳かしながら蛍子は心配そうに瞳を細めた。

「いや、そんな酷い扱いは受け無かったよ」

「そう、ならいいんだけど。でもなんで有翼人と思われたの？」

どう考えても太陽は翼なんぞ生えていない。生粋の日本人であり、人間だ。というか翼が生えている人間など見たことが無い。いたとしたら、まず研究対象として実験室に送り出されているだろう。

「地上に住む人間は瞳と髪の色が違うんだ。けど有翼人は瞳と髪の色、しかも翼の色まで同じらしい」

日本人は黒い瞳に黒髪だ、もちろん染めたりしていなければ。

「よく無事だったね」

横暴な話だと思うが、どうやら現実の話のようだ。本当によく無事だったと思う。

「本当だよな。まあ俺が魔法を使えたつても理由だと思うけど」

へえ、お兄ちゃんってば魔法使いだったんだね、すごい！と、もう大学生になる蛍子が思うわけもない。

「ふっ、魔法ねえ」

「そうそう、その魔法」

蛍子の鼻から空気が出た。

「兄さんって魔法使いだったんだ」

「そう、だから重宝がられてすぐに牢獄から出してもらえたってわけ。まあ、そのおかげで戦闘じゃ先頭にたってるけど、なんつって」

嫌な空気が蛍子と太陽の間に流れた。

「じゃ、魔法出してよ。魔法って見てみたいんだけど」

先ほどの発言を綺麗に無視して蛍子が久しぶりに瞳を輝かせながら兄にズイッと寄った。

「ごめんな、異世界じゃないと魔法は使えないみたいだ」

「本当に魔法使いなの。嘘なんてついたってなんのお得情報もないよ」

「まじで、ちつくしょー！ って、本当だから。魔法が無かったら今も『地』の人間は負けっぱなしだったからな」

役に立てることが嬉しいのか思い出し笑いをして、どこかを見上げている。

「というか、兄さんがお世話になってる国ってなんていう名前なの？」

太陽は螢子を見て、にかっと笑って言った。

——オエリフィア大陸、と。

ブログ（１）（後書き）

作者は基本倒くさがり屋なので不定期更新です
皆さんからのがんばれメールがあつたら頑張れそうです

ブログ（2）（前書き）

投稿はこれでいいのか…？

プロローグ（2）

——オエリファイア大国。

それは地上に5つある大国の中で最も強い勢力をもつ。
若き国王の下、これまた鬼才な武官と文官がいる。彼らの下に多くの臣下が控えている。

この国は民に厳しい重税を課さない、むしろ国民のために野菜の品種改良の仕方、人工日光を開発して提供している。

そのためか、人々は若き国王フレゼリクⅡRⅡナタルニアに忠信を誓っている。

+ + +

「なんで兄さんは戦っているの」

蛍子は勝手に回想を始めてる兄へ疑問を口に出した。

「そりゃ、友達のフレゼリクのためだよ」

「違うよ。私が言っているのはどうして兄さんが戦っているのかってこと」

先ほどと同じ意味じゃないかと首を傾げながら蛍子のほうに顔を

向けた。

「だから異世界に住んでいない兄さんが何でわざわざ地上に住む人間の味方をしているの？ 確かに私たちには翼なんてないわ。人間だもの。でも有翼人っていう人種も感情がある人間でしょ。話し合うことって出来ないのかな。何年も戦い合って互いの種族を絶滅させるんじゃないかって共存はできないのかな」

蛭子は戦争が嫌いだ。人が死んでいくのに感情移入をしてしまう。授業で戦争のビデオを観るときに必ず気分が悪くなり途中で抜け出してしまう。その後は気分が悪くなって保健室に入り浸りだ。そんな蛭子は家族に戦争に行ってもらいたくなかった。現代では戦争なんてものは日本には無いが異世界では違うらしい。

戦うよりも話し合ってほしかった。そして戦いに行ってしまう男たちを出迎える家族がいることを兄に分かってもらいたかった。

だが兄は眉を顰めて語気を荒げた。

「お前は確かに俺より偉いよ。でも分かってないと思う。フレゼリクは話し合いをいつでも求めている。けれど有翼人は話を聞こうともしない。あいつらは俺たち下等な人間に絶滅してもらいたいんだ」

「本当に？ 確かに兄さんの話を聞いててもフレゼリクさんっていう国王が努力しているのは分かるよ。でも、私は兄さんのことを言ってるのよ。兄さんは有翼人の人と言葉を交わしたことがあるの？ ただ戦うっていう与えられた使命だけをしているんじゃないの？」

？ きっと兄さんが異世界に行けて魔法が使えるってことは戦う、
じゃなくて有翼人と人間が共存できるように神様が与えてくれた力
なんじゃないかな」

時々、蛍子は思ったことを純粹に口にする。それと同時に他人に
希望を持たせるような、恥ずかしい言葉を口にできる。本人は無自
覚であるが。

だから言葉に詰まる。

そんな期待をもたせないでくれ、俺はそんなにいい奴じゃないん
だとも思う。けれど蛍子の瞳は眩しすぎてくもらせたくないとも感
じる。

「ああ、そうだな。俺も有翼人と話してみようかな。何か解決策が
見つかるかもしれないしな」

「うん、それがいいよ。後ね、太陽が無くても育てられる植物って
あると思うの」

じゃあ解決策でも考えよう、その国のことも教えてよとノートを
取り出して自分のアイデアを書き入れていく蛍子をほほえましく
見つめるのだった。

ブローグ(2)(後書き)

パソコンに苦戦中♪

お騒がせな兄（１）

オエリフィアの国はいつもどんよりとした天気である。半日に一回は雨が降り続ける。作物は日光を浴びることができずに腐っていく毎日、それに比例して多くの民が飢えにより死んでいく。

オエリフィアの若き当主、フレゼリクは３日も降り続いている雨を見つつ秀麗な眉を寄せながら溜息を長々をついた。

「溜息ばかりじゃ、幸せが逃げて行くぞ」

太陽が国王の机に座ってノートをめくりながらフレゼリクに言葉を投げかける。

「幸せなぞ、とうの昔に置き忘れた」

まだ２４歳という若さでありながらもその顔には苦悩が刻まれていて実際の歳より老けて見える。国民の飢餓、奪われ続けている太陽、育たない作物。悩み事は山のように出てくる。どんなに働いても仕事は減らない。それどころか、増える一方だ。

窓から目をそらし執務のため机に戻ろうとするが、太陽が座っていて邪魔である。

「どけ」

太陽を手で追い払おうとしたが、ふと太陽が見ている物に興味を

覚えた。

「なんだそれは」

紙が幾重にも重なって見て見たこともない文字で文章らしきものが書かれている。きっと太陽がいる世界、地球とやらの言語なのだろう。

まるでミミズのたうち回ったような字だ。フレゼリクはしばらく見ていたが理解不能だと分かり目を逸らす。

「妹と一緒に考えて作った案」

ここに蛍子がいたら抗議していただろう。考えたのは自分で太陽はただゲームをしていただけだと。

「何の案だ」

「オエリフィーア復興計画」

「はっ、何も知らない小娘が案を考えただと。そんなのは我らがとうに考えつくした」

「そうか？ 結構おもしろいぞ。俺の妹は優秀だからな。自宅プランターとかは数に限りがあるけど、ビニールハウスとか、人工日照とか」

白い歯をこれでもかと輝かせながらフレゼリクを見る。フレゼリクは兄妹というだけで太陽にそこまで信頼を置いている蛍子が気に食わない。嫉妬だとは分かっている。

自分には兄が一人いた。幼いころは兄の後をまるで雛鳥のように追いかけて遊んでもらっていたのに兄は王位継承がフレゼリクになると分かった瞬間、いともたやすくフレゼリクを裏切った。だからいつまでも仲睦まじい2人がうらやましい。

自分が得られなかった愛を何の代償なしに持っている会ったこともない女が憎かった。

だが太陽にそんな顔を見せもせずに机から太陽を追っ払った。

+ + +

受験生が最も苦しむ冬休みが始まった。

だが蛍子は冬休みを満喫していた。蛍子は推薦で大学を受験し、見事受かっていたのだ。

そのため冬休みに太陽のアパートに遊びに来ていた。

何カ月ぶりだろう、兄のアパートに来るのは。以前来た時は母と一緒にだったが、その時は掃除をただけですぐに帰ってしまった。今回も不精な兄に代わり蛍子が掃除をしなくてはならない。だがその後、東京を案内してもらえるのだ。

蛍子は2泊ほどの予定で切符を買っておいた。

アパートの鍵を事前に預かっていたためインターホンも押さずにドアを開けた。

「兄さん、来たよ」

部屋はそれほど汚くないだろうと高を括っていた。だがドアを開けた瞬間、生臭さと消臭剤のジャスミンが混ざった臭いがした。思わず、うつ、と声が漏れた。

何、この臭い……。

兄の存在を確認するよりも早く窓を開けて外に出た。

「おつ、^{けい}蛭、来たのか」

「来たのか、じゃないわよ。何なの、この腐った臭い」

呑気に薄汚れたソファアに座る兄を一瞥する。

「えっ、普通じゃないか」

とうとう嗅覚もイカレタらしい。この部屋に年中いたら確実にそうなるが。このままでは蛭子もこの兄と同じように鼻がイカレルかもしれない。

「ま、いいわ。どうせ分かったことだわ」

鞆からマスクを取り出して顔に装備し始めた。

まず、鼻から顎を覆う大きなマスクをつけ長い髪を一纏めにして、手にはゴム手袋を装着する。エプロンを羽織り、戦闘態勢のできあがりだ。

「よし、始めますか」

太陽を外に放り出して一人で黙々と掃除をし始めた。

お騒がせな兄（１）（後書き）

うーん

まだ長く書いていいんだよねー

お騒がせな兄(2)(前書き)

なんとか、行く前まで書けた

お騒がせな兄(2)

——コトコト、鍋が沸騰していい香りが部屋中に広がる。

蛍子はエプロンをしながら台所に立っていた。

「ん、こんなもんね」

調度いい温度になった鍋にお玉で汁を取って味を確認して火を止めた。

今日は太陽の部屋掃除が半日もかかってしまい、どこも行けず仕舞いだった。

だが明日がある、と料理をお皿に盛りながら蛍子は考えていた。

「おー、さっぱりした」

お風呂から太陽が下半身にタオルを巻いただけで出てきた。

「おーい、変質者。ご飯できたよ」

「おっ、今日はロールキャベツか。いやあ久しぶりのまともな夕食

だよ」

いつも太陽はバイト先の残り物を食べて過ごしている。そのため野菜など全く摂っていなかったためテーブルの上に乗っている盛りだくさんの野菜を見て眉を顰^{ひそ}めた。

「大量な野菜が目に入るので。俺は虫ではないため、こんなに食べられませんのです」

「・・・部屋でG飼^{ゴキブリ}ってるんだから虫と同化してるんじゃないの？」

そう、食事中の方には申し訳ないが太陽の部屋にうじゃうじゃといたのだ。奴の子供がいっぱい。。直ぐにスプレーで退治したが、さすがに蛭子もあ的大量ぶりには悲鳴を上げた。

「うん、さすがうまいな」

トランクスを履いただけのままで、太陽はロールキャベツを口にした。

改めて言うが、今は冬である。多くの家庭では炬燵を出してヒーターのスイッチを入れて暖まっているだろう。

もちろん太陽の部屋にも炬燵がある。太陽は上半身裸のまま足を入れた。太陽の部屋は扇風機は出しっぱなし、という夏の様式のままであつたため蛭子が掃除のついでに炬燵を出したのだ。

その上半身を見て蛭子は目を見張った。

「ちょっと、前より傷が増えていない？」

秋に帰省してきた時より大きくはないが無数の切り傷と青あざが

広がっていた。

「ああ、2、3日前に行ってきたんだよ。その時は1週間位だけだったんだけど」

「また行ってきたの？今はどうなってるの」

太陽は3カ月に一回の時もあれば、1か月に3回も行く時もある。いつ呼ばれるのかも解らない。ただ呼ばれるのを待つだけなのだ。あちらでは1週間たっているのに、こちらではたったの数時間しかたないと言う。時間がこちらの方が遅いようだ。しかし、たまに2、3日いない時があるため友達に失踪として扱われそうになった。

「ん、結構やばい。いよいよ本格的な戦争が始まるみたいだ。国内でも緊張しててな、フレゼリクなんか殺気立ってるぞ」

「やっぱり分かりあえなかったか」

「せめて女帝が代われれば何かが変わるんだけどな」

近々、『天』と『地』の戦争が始まるらしい。フレゼリクは、ほんの一部だけでいいから太陽を分けてくれと申し出たがにべもなく断られた。

「気をつけて」

不安気な表情で蛍子は太陽を見つめた。

「大丈夫だって、心配すんな・・・つぶえつくしょーん」

「・・・もう一回お風呂入れば？」

「ご飯、食い終わったら入るわ」

+ + +

「ご飯も食べ終わり食器を片づけていると、ふと太陽には似合わないアンティークが目に入った。

「何これ？」

掃除をしていたのに全く気付かなかったのは堂々と置いてあったかのもشれない。デジタル時計のすぐ下にあった。

可愛いのに時計の下敷きにするなんて、もったいない。

手にとって見ると古めかしいが色あせたピンクのオルゴールだった。よくは見えないが木に囲まれた男性が目に入る。男性は横顔で誰かを待っているみたいだ。

四方を見てもみるが判別できるのは、それだけだった。

兄がオルゴール？ 音符も読めやしない音痴が持っているなんて考えられなかった。

いい曲が入ってるからかもしれない、と思って横に付いてるネジを回してみた。だが何の音もしない。壊れてるのかしら、今お風呂に入っている太陽にドア越しに声をかけた。

「兄さん、このオルゴール壊れてるの？ 大事じゃなかったら捨てるけど」

その瞬間、ザバンツとお風呂から上がる音が聞こえた。

「ストップ！！」

いきなりドアを開けて裸で飛び出してきた。

「そっちがストップだ！」

さすがに全身裸の兄を見るわけにもいかず、手に持っていた台ふきを投げた。調度、皿を拭いていたため濡れぎみ＆小さい布巾だったが。

なんとか太陽にタオルを腰に巻かせ、話を再開しはじめた。

「なんで捨てちゃ駄目なのよ。これ回しても音でないし、第一兄さんには似合わないほど乙女なんだけど」

「・・・今、回せたって言ったか？」

「は？ そうだけど。オルゴールって回すものでしょ」

眼を見張って蛍子を見ている理由が分からず首を傾げた。とうとうオルゴールの使い方まで忘れたのかと太陽の頭を悲しげに見る。

「何で回せるんだ」

「意味が解んないって。でも鳴らなかったよ。壊れてるみたいよ」

「いや、壊れてない。これが異世界に行く鍵なんだ」

一瞬、呼吸が止まった。

今、何と言った？ この古びたオルゴールが異世界への鍵？ . . .
どうやって太陽はこの小さな、片手で持てる物から行けたのだろうか。

両者の間で沈黙が流れた。

だがその沈黙を破るのは、やはり突拍子も無い太陽の言葉だった。

「もしかしたら蛍も行けるんじゃないか」

「どこに」

「もちろん異世界、オエリフィア王国だよ」

確かに一度は違う国へ行ってみたいと思ったことはある。誰も知らない場所へ。だが、そんなのは夢だ、幻だと成長するにつれ想いは消えていった。

太陽が異世界に行った、と言っても、それは自分じゃない。選ばれたのは太陽だと分かっていた。自分の兄はそれに見合う素質があるのだから。それに異世界に行ってみたい気持ちも薄れている。

戦争ばかりある国には行きたくないのが正直な所だ。危険を顧み

ず頑張っている兄には悪いが一緒に行きたくない。

「私は無理よ。選ばれた人じゃないもの。兄さんみたいに勇気も力も頑丈な身体を持つてゐるわけでも無いもの」

「そうか？ でも、もし行けたらオエリフィアを案内してやるかな」

苦笑して蛭子は片づけの続きを再開した。そんなことはありえないと分かっているのだ。けれど蛭子は太陽にその時はお願いすると言って席を立った。

太陽はもう一度お風呂に入らないように着替えを始めた。

水を出しながら食器を洗っていると、ふいに懐かしいような甘いメロディーが聞こえた。

太陽の携帯が鳴っているものだと思ったので、そのまま放置していたがメロディーが長い。もしかしたら電話かと思って水を止め、トイレ中の兄に声をかけた。

「兄さん、携帯鳴ってるよ。もしかして彼女？　なんか聞いたこともない曲だけど不思議な甘い曲だね」

「つつ！！」

トイレを流す音が聞こえると、ドアが勢いよくあいた。
太陽のズボンは下がったまま、かるうじてトランクスが上げられていた。

そのまま居間に行くと野太い悲鳴を上げた。

「やべえ、何も仕度してね」

その様子に洗い場から顔を出し、鳴ってるのは携帯じゃないと気付いた。

鳴っているのはあのオルゴールだ。

しかし先ほどは鳴らなかったはずなのに、頭の片隅で考えたが今の太陽を見て、そんな考えは一気に吹き飛んだ。

太陽の奇行は今に始まったことでは無いがさすがに様子がおかしい。

「何してんの？」

手当たりしだいに大きなバッグに色々な物を詰め込んでいる太陽を見つめるしかできなかった。せっかく片づけたのに、また散らかるんだな、と頭の中で考えた。

「やべえ、もうすぐ行っちゃう」

意味不明な言葉を発しながら焦る太陽、ただ切羽詰まっているのは伝わる。

「・・・あの、頭大丈夫？」

恐る恐る蛍子は太陽に声をかけた。

すると、やっと蛍子に気付いたように手を止めると急に蛍子の手首を掴んだ。トイレに行った後なので洗っていない手で蛍子を掴む。若干、顔が盛大に引きつりそうになっただが我慢をした。

「そろそろだし、蛍ももしかしたら行けるかもしれないから、ちょっと掴まってな」

行ける、の言葉にやっと思考回路が動き始めた。もしかして、いや絶対そうだ。蛍子は満面の笑みを浮かべる太陽から最悪の事態を嗅ぎ取る。

「ちょっと待つて。私はいいの」

手首から手を剥がそうとした時、オルゴールが眩しく光った。

「つつ!?!」

あまりの眩しさに蛍子は手で眼を覆った。

「おい蛍っ!」

太陽の声を最後に蛍子の意識は途切れた。

お騒がせな兄(2)(後書き)

これからも、ゆっくりをモーターにいきます

異世界（1）（前書き）

眼が乾燥するー

異世界（1）

「ん・・・」

何だかふわふわする。さやさやとした風が吹いていて、どこか不思議な場所で漂っている気分だ。なんだかまるで水の中にいるように。ただ下半身が冷たすぎる気がする。

蛭子は寒さで目を覚ました。

まず目に入っただのは草だ。

青々とした雑草に顔をつけていた。

「寒っ！！」

そのまま目を下に向けると下半身が水に浸かっている。

「なんで！？」

驚いて飛び起き、そのまま下半身を出した。

どうやら湖に入っていたようだ。蛭子は浅瀬にいたようで何なく身体を湖から引っ張り出せた。

だがなんで湖にいるのか疑問が頭をよぎる。

あ、そうだ。

兄さんが異世界に連れて行くって・・・。

「はい!？」

じゃ、じゃあここは異世界って言うの？

もう一度辺りを見渡した。

青い空、白い雲、そして眩しい太陽。どこからか長閑な風がふわりと吹いている。

うん、日本だ。

頭が一瞬現実逃避をし始めたようだ。

またも言うのが今の日本は冬だ。

どこかしらの県では大雪警報が発令されて除雪作業が大変な季節なのだ。それなのにい、まるで春のような雰囲気、うん現実を見ようと思うができない。

「いやいや、まさかそんな非現実的な。だってねえ」

今まで蛭子はパニックに陥ったことなど数えるほどしか無かったが、一人でパニックになると歯止めがきかない。

「異世界なんて夢物語でしょ。異世界なんて連れてこられたなんて言われたら兄さん、本気で許さない」

自分が壊れることも気づかない。だが沸々と怒りが出てくるのは分かる。何で勝手に連れ出すのか、そもそも蛭子は嫌だと言ったではないか。

「全く、兄さんったら冗談がきつい・・あれ？」

——太陽が見当たらない。

そう言えば、オルゴールから聞いたこともない曲が聞こえて眩しい光が体を覆ったと思ったら・・ここにいたんだ。
最後に太陽の声が聞こえた気がする。

「あの馬鹿兄さんっ！！」

一発殴るだけでは物足りない。
まず、兄の胸元をつかみ、首をがっくんがっくんして脳を揺らして・・・と考え始めて気づいた。

「うっ、どっ？」

多分、こちらに来る時に別々に飛ばされたのだろう。太陽の手を離してしまったことがいけなかったんだろう。

・・城、多分そこに太陽がいるはずだ。

まず会いに行こう。

そう奮い立たせるも自分の居場所が分からない。

流石に一人は心細い。湖の周りには人がよく通るのだろう、人が歩ける道がある。

だが前に進むべきか、それとも後ろに行くべきか。はたまた、この湖から流れ出る川を下った方がいいかもしれない。そうすれば、

どこかの街に着くだろう。

『地』の救世主となった兄だ、知らない人はいないだろう。そこで人に会ったら聞けばいい。

蛍子が悶々としていると人の話し声が聞こえてきた。

「さすが・・・ですね。ありがたい・・・」

耳を澄ますと後ろから聞こえてくる。だんだんと近づいてきているようだ。

人だ、良かった。城への道を聞こう。

蛍子は話声から女の人、しかも高齢で柔和な感じがしたので安心してそのまま待っていた。

だが近づいてきたのは薄汚れたフードを被っていて、顔が全く見えない人だった。声から老婆と分かるがその横にいる、これまた灰色のフードを被った小さな子がいる。きっと孫だろう。

あまりに不躰に見たせいか、子供がこちらに気づき祖母のロープを引っ張り、こちらにも気づいたようだ。

すぐに孫を自分の後ろに隠したが蛍子を見て緊張を解き、穏やかな笑みを浮かべ近づいた。

「あら、こんな所で何してるのかしら。湖に落ちてしまったの？」

「はい、実はそうなんです。城へ行く途中だったのですが、少し休憩しようと思った所、つい足を滑らせてしまって」

肩をすくめておどけてみせた。こちらを窺う老婆の目元は柔和で蛍子は自分の祖母を思い出して優しく話しかける。

「まあ、それは大変でしたでしょう」

「まあ、笑い話になることを願ってますよ。それより可愛いお孫さんですね」

蛭子はにっこり子供に笑いかけた。

びくりとしたようだったがおずおず前に出てきて蛭子に片手を差し出す。

「僕、男の子だよ。お兄ちゃん」

「ごめんごめん、格好いい子ですね」

男の子の手をとりフードの上から頭を撫でた。

「いえいえ、口だけは達者なんですよ」

孫を誉められて悪い気はせず蛭子に対する態度も軟化したようだ。

「それよりお2人はどちらに？」

「私達も王都へ向かう途中でしたの。良かったら一緒にしませんか？」

「いいんですか、ぜひお願いします」

願ってもみない申し出に勢いよく食いついた。

「王都へはどういった用事で行くんですか？」

「太陽様が食糧の無料配布を行っていると言われて分けてもらおうと思ったのですよ。私たちみたいな年寄りや働けない子を対象にして下さるなんて本当にすばらしい方ですわ」

いいことをやっているじゃないか、まるで自分が褒められたような気分になった。

「お兄ちゃんは何をしに行くの？」

・・・お兄ちゃん？

そんなに男らしく見えるのだろうか、あまり凹凸のない胸を見て年頃の女としては少し悲しく思った。

だがきらきらと輝いている無垢な瞳に訂正するのも憚られたので否定もせずにいる。うん、私はお兄さんですよ。

「お兄ちゃんも太陽、様に会いに行こうと思ってね」

一応、尊敬されているようなので『様』をつけておいた。というか訳も分からぬ小娘がいくら兄だからといって呼び捨てにしているのではないだろう。

「やっぱりですか、志願されるのですね」

「ん？」

何の話だろうか、だが聞き返すのも怪しいかと考え、頷くだけにした。

「くしゅん」

気を失っている間に長い時間、水に浸かっていたらどうか、急に寒気が襲ってきた。主に腰が冷えている。腰の冷えは女の子には最悪だ。

「よかったら、どうぞ」

親切にもお婆さんが自分のフードを貸してくれた。とったフードの下から薄茶の髪と柔和な顔が出てきた。
すごい色、さすが異世界。

「すみません、ありがとうございます」

「いえいえ、これから私たちを守って下さるお方に少しでもお手伝いできるなんて光栄ですもの」

ふむ、確かに眼の前にはどう見ても70近いお婆さんと10歳の男の子しかない。腕に自信は無いがせめて2人を逃がすくらいはできるだろう。

よく2人だけで王都に向かうな、と感心しながらも「まかせて下さい」と言った。

そして3人は王都へ向かった。

異世界（1）（後書き）

誤字、脱字など、じゃんじゃん教えて下さい

異世界（2）（前書き）

ちよつと長い

疲れちゃいますね

異世界（2）

・・すごい。

まるで東京みたいに人が行き交っている。隙間という隙間は人によつて埋め尽くされ、人の声が途切れることなどなかった。王都はとても賑やかだった。

「うわ、すごい人」

感嘆して溜め息が出た。

東京には遊びに行ったことがあるが、その時よりも人が多く感じる。王都は煌びやかだ。人も建物も輝いているようだ。

「僕が住んでるとこよりおっきい」

蛍子と手を繋いでいる男の子、ジェシを見返した。

「ええ、そうなんですよ」

蛍子の質問に、ソフィアが代わりに答えてくれた。

ここに来るまでに3人は大分^{だいぶん}打ち解けていた。ここまでに4時間弱ほどかかったがソフィアとジェシは丸1日かけて歩いて来たと言われ、蛍子は数時間でへばってしまった自分を恨めしく思った。

「すごい活気に溢れているね」

やはり異世界と言うのか、人々は異彩を放っている。いや、この場合ジープンに長袖の蛍子の方が可笑しいのだが。

紫や黄色などの濃くも薄くもない色の髪があちこちをうろついている。

2人との会話によって分かったことがある。

ここでは髪や眼の色が濃い方が高い身分、地位を有するようだ。原色に近いほど高貴であり、貴族の地位が与えられている。だが色が薄いとただの民、あまりにも薄いと下民として見られることがあるため、色が薄い人たちはフードを被って過ごしている。

ソフィアとジェシは薄茶の瞳と髪の色を有している。だからフードを被っていたのだ。

それなのにソフィアは蛍子にフードを貸してくれた。その話を聞いて、すぐに返そうと思ったのだが蛍子の服がまだ濡れているとの理由により貸し続けてくれている。感謝をしきれないと思った。

「何か食べますか？」

「いえ、私はいいです。まだ疲れてないので」

疲れてない、と言うが蛍子は肩で浅い息をしていた。それにお金など持っていない。明らかにそこらにある屋台で売り買いしている人達が握っている硬貨は見たこともないものだ。

「おばあちゃん、僕、のどが渴いたよ」

「あらあら、ごめんなさいねジェシ。何か買いましょうか」

どうやら持ってきていた飲み物は空になってしまったようだ。
近くにある屋台へソフィアが飲み物を買おうと近寄った。

すると屋台にいたオレンジ色の髪をしたおじさんがソフィアに気付き目をつりあげた。

「近寄るな、下民。ここはお前たちの来る場所じゃねえ」

そして犬でも追い払うように手を振る。その拍子にソフィアはよろめいてしまった。

「おばあちゃん」

ジェシが庇って前へ出る。

その拍子にフードが捲れ上がった。

「つつ、咎落ちか!」

その言葉に遠巻きしていた人々も色めき立った。

その視線は片腕しかないジェシに釘付けた。

咎落ち? 蛍子はこの差別に憤りを隠せないでいながらも疑問に思った。

確かに歩いている途中でジェシに腕が片方無いとは気付いていたが態々指摘することではない。
わざわざ

それなのに腕が無いだけで非難されるとは、どういう見なのだ。
確かに人とは違うことは人々の畏怖を生む。しかし、この反応は

些が大きすぎる気がする。見習うべき大人とよべる成人した人までもが蔑んだ目をしている。

「ちょっと、あなた、いい加減にしたら？ か弱い老人と子供に何するのよ」

「いいんです蛍子さん。さあ、早く行きましょう」

腕をソフィアに引かれながら納得できない様子の蛍子が立ち去った。

城についたら、この差別をなくすべきだと太陽に言おうと思いつながら大人しく2人の後に続いた。

「先ほどありがとうございます」

ソフィアが市場から抜け出した処でお礼を言った。

「お礼を言われることなんてしてないです。全く、お客にあんなことを言うなんて礼儀を知らない大人でしたね」

「・・・蛍子さんは咎落ちを見ても何もおっしゃらないのですか？」

「咎落ちって、ただジェシに、その、右腕が無いことですか？ 腕が無くても充分に生活できるじゃないですか。それなのに罪人みたいに言われるなんて心外です」

そう言っただけで怯えているジェシの頭を軽く撫でた。

眉を吊り上げ、本気で怒っている蛭子にソフィアがもう一度お礼を言った。

「これから二人はどこに行くんです？」

「私たちも城へ行こうと思ってます」

「じゃあ、城まで一緒に行きましょう」

「・・・」

一瞬、ソフィアの動きが止まったがすぐに笑顔になり言った。

「そうですね、どうせ目的地は一緒なのですから」

+ + +

城までは行列が続いていた。何百人という人たちが列を連ねている。話声や仕草からするに年配の人が多い気がする。

その列の最後に3人は並んだ。

「すごい人だね」

「それはそうですよ。何せ、太陽様が無料で食糧を配布して下さる
と言つのですから」

確かに並んでいる人たちは皆そろってフードを深く被っていた。

「けれども、よろしいのですか。蛍子さんはこの列でお並びしなくても正門からすぐに入れるでしょうに」

「いえ、お2人の警護役をかって出たのですから最後までお伴しいと」

「まあ、さすが黒の騎士団ですわ」

実を言うところ、ただの情報集めだ。

もちろん、2人を守るといふ目的もあったが、まずは自分に有利な情報を優しい2人から聞き出そうという魂胆であった。

あの、おちやらけ兄さんめ。大事な情報は事前に教えておくものでしょうに。

また新たに太陽殺人計画をひっそりと練っていた。

待っている間、3人で話し続けていた。

待つこと4時間、さすがに疲れてきた。ジェシなど蛍子の腕の中で眠っている。

「本当にごめんなさいね」

声を抑えてソフィアが申し訳なさそうに呟く。

「いいんですよ、一日も歩いていたらジェシも疲れちゃいますよ」

4時間も待つて、やっと城へ入れた。

城の中は本当に煌びやかだった。あちこちに贅をおしみなく使っている様子がわかる。床は大理石で天井は広く、日光が天井から差し込んでいる。

その光を受け、王宮内がきらきら輝いている。

その中央にみごとな台座がある。あれに王様が座るのだろっ、恐ろしく仰々しい。黄金の手すりに真っ赤な背もたれ、なんだか兄の話とは違う気がする。

ここでは民がいつでも貧困に苦しんでいるため、国王が財を投げうって少しでも民を救おうとしていると聞いていた。

だが、食糧の無料配布を行っているし、ただこの間は民に見せるためだから、こんなに派手にしているのだろうと思い込んでいた。

「次の者」

——自分の眼を疑った。

玉座の前に20代の男性が2人いる。どちらも黒髪、黒目の二枚目であると思う。

だが、それよりも蛭子を驚かせたのは2人の背中にあるものだ。

——翼が生えている。

しかも黒い、カラスよりも艶やかな黒い翼だ。

たまにぴくりと動いているそれは本物だと思わせる。

それにフードを被って並んでいた人たちもまた次々と自分の翼を広げている。

ある者は薄いピンク色、またある者は薄い黄色、どの人たちも色は違えど一環しているのは翼があり、色が薄いということだ。

あまりの光景に眼を見張った。

思考回路が途中で遮断されてしまったようだ。

黒い翼の2人は翼を出す民の名前と住んでいる所、翼の色を記入している。

それが済んだ人は別の部屋に案内されていった。

おそらく、そこで食糧の配布が行われているのだろう。

まずい、頭の中では分かっているのにどうすべきか考えつかない。何の対策、考えも無いまま蛍子たちの順番が来てしまった。

ソフィアは2人の男性の前に立ち翼を広げていた。やはり想像した通り、彼女は薄い茶色の翼だった。そしてソフィアにおこされた眠そうなジェシもまたそうであった。

「次」

彼らが蛍子を見た。

「つつ!!」

そこでやっと頭が動き出した。

もちろん蛍子に翼など無い、どうすればいい、どうすれば助かる、顔が真っ青になっていくのが分かった。

「この方は入団希望者ですよ」

ソフィアが口をはさんで説明してくれる。

「蛍子さん、道中ありがとうございます。またお会いできました」

らお声をかけて下さいね」

「お兄ちゃん、ばいばい」

2人が蛍子を見てにこにこしている。ソフィアは軽くお辞儀をし、ジェシは可愛らしく手を振っている。

今、1人にされると非常に心細いと感じるのだが無意識にジェシに向かって手を振り返していた。

「なんだ、正門からはいればよかったものを。まあいい、ここで検査するか。どうせ、お前たちで終わる」

蛍子の後ろには後数十人しかいなかった。

「じゃあフードをとって」

少し真っ黒というには忍びない男が話しかけてきた。切れ長の目が蛍子を見つめる。細身なのに引き締まった身体だるをしていて怠そうだが、楽しそうな顔つきをしている。

もう1人の彼は少し精悍な顔つきをしていて、いかにも軍人らしい身体つきだ。髪も自分に合わせているのか、短髪であり彼に似合っていた。

だがいくら待っても目の前の人物、蛍子は動こうとしない。

「おい、早くしろよ」

もう1人が短気なのか、無理やり蛍子のフードをはぎ取った。

——その瞬間、皆が息をのんだ。

フードからこぼれ落ちた、これでもかという黒く艶がある髪。夜空のように暗い、瞳。

陶磁器のような白い肌。驚きの余り、眼がこぼれそうなほどに見開いていた。

「今日のルーキーはやるね。絶対に副隊長まで上り詰めるんじゃない？」

「ふん、色がこれでもな。翼を見ないには何も言えん」

「おっと早くも宣戦布告ですか。ロツツイ、副隊長の座、危うし」

「黙れ、おい小僧。早く翼を出せ」

だがロツツイの恐ろしさに身がすくんでいるのか、何の反応も示さない。

「あーあ、ロツツイが怖がらせるからだよ」

「ふん、こんなもんで怖がれちゃこの先やってけねえぜ。おい、しっかり立て。全く女みたいに細い奴だな。こんな軟弱な奴じゃ無理に決まっている」

蛍子の腕をつかんで、もう一人の男の方へ向き直らせた。ロツツイの手はごつごつしていて、腕は蛍子の2倍の太さだった。

蛍子の眼は潤んでいるし、細かく震えていた。

「ブライト、やれ」

「はいはい、あれこの子震えてる。可愛いな、その表情とってもそる」

顔を近づけて蛍子に妖艶にほほ笑んだ。蛍子はやっと身の危険を感じ逃げようと試みた。

「ちょっと逃げちゃ駄目だよ。これから僕たちと付き合っていくには必要なことじゃないか」

「悪趣味が」

腕を離そうともがくが、筋肉が服の上から分かるほどの肉体を持つ身体は挺子でも動かない。

爪を立ててもなんの反応も痛がる様子を微塵も見せない。

「つやだあ!!」

「この子、子猫みたい。本当に志願者かな？ 繊細な女の子にしか見えないんだけど」

ロツツイからじたばたしている蛍子を受け取り、背中に手を当てた。

背中が熱い。

何かが出てくる。

——ばさっ、蛍子が眼を開けると眼の前を白い純白の翼が覆っている。余りのことに茫然とする、だが背中から暖かいぬくもりを感じ心地よい気持ちに陥る。

力が抜ける温もりに瞼が閉じそうになったが周りを見ると、誰もが蛍子の翼に眼を奪われている。

横に立っていた2人もだ。

今がチャンス、そう思った瞬間、勢いよく身を翻していた。後ろはまだ人がいて出られない。それならば中に入るしかない。

蛍子は背中から翼を出しながら、王座を背に近くのドアを開けて駆けだした。

走りながら蛍子はすでに確信した。

小刻みに震える体を腕で抑えつけながら、奔走する。

——ああ、ここは『天』だ。

異世界（2）（後書き）

はあ、疲れた
てか蛭子ちゃん、まさかの天へ

挿話（1）

莊嚴たる空気を醸し出している王宮の中を2人の武官が並んで歩いていた。だらだら歩いている男ときびきびとした足取りの男との組み合わせは異様に見える。

「あーあ、面倒くさいね」

ロツツイはちらりと冷たい眼を隣の男に向けた。

「くどいぞ。それにこれは太陽様がお考えになった事だぞ。我ら民のためのお考えだ」

「民のため、ねえ」

怠そうに歩きながら自分の猫っ毛である黒い髪を片手で弄びつつ、ブライトは小さく呟いた。

本当に民のためなのか。ブライトは王宮に入り始めて5年、常に思い続けている。

これから行われる『お恵み』のために2人は駆り出されている。お恵み、それは体のいいようにしか聞こえない。確かに民の髪、眼の色、そして翼を見る。その時に王宮の王宮に来てくれた謝礼として食べ物とその家へと送られる。

また才に恵まれた者がいれば、引き抜き王宮がそだてあげる。
だが民から俊才が生まれる子など無いに等しい。

民の子は民、貴族の子は貴族、とすでに生まれる前から決ま
っている。なぜなら、貴族の子は色が濃く生まれる。両親が濃
い色を持っているからだ。

だから、これは行われなくてもいいように感じるのだ。

「この役は嫌だねえ。嫌悪が走る」

ブライトの小さな呟きをロツツイは見逃さなかった。

本当は太陽様の意に背いた者として処罰しなければいけない
がロツツイも同じ気持ちのため何も言えなかった。だがロツツイ
は副隊長として言うことはできなかった。

忠誠を捧げている太陽様に反発などではいけないのだから。

ロツツイは黒の騎士団の副隊長を勤めている。ブライトは黒
騎士の第3副隊長だ。

黒の騎士団とは、その名のとおり翼が黒い者の集団だ。他の
色の翼を持つ有翼人には魔法が敵わないが体術が優れている
者の集まりだ。

黒騎士は総隊長、そして副隊長、その下に黒騎士7番隊がある。

隊長たちは皆、濃い黒を持っている。原色に近い者ほど強い
のだが、それに加え総隊長と副隊長は4枚羽であり、しかも大
きい翼だ。

そのため誰もが憧れる存在になっている。

「さつさと終わらせるぞ」

精悍な顔を曇らせながらもロツツイは玉座の間の扉を開いた。

+ + +

ずっと立ちっぱなし、休憩もなしに半日が過ぎた。
だがフードを被っている者達の列を見て、やっと落ち着ける。
列は後百人というほどになった。

隣では、この部屋に入ってからずっと仏頂面であるブライトに苦笑した。

男前な顔立ちなのに崩れている。

「おい、ブライト。後百人ほどだ」

「はいはい」

ずっとロツツイにまかせっきりだったが後百人という単語にやつとやる気を見せた。

「やる気が遅いぞ」

「だって朝からあんなんじゃないさあ」

朝は王宮から人が溢れ出し長蛇の列をなしていた。その数、ざつと数千人。

だからブライトは若造のままなんだ、と心では思うが口に出さなかった。口に出したが最後、ずっと嫌がらせを受ける。

「おばあちゃんからどうぞ」

「はい、ありがとう」

次は老婆とその孫だった。老婆の方はフードを最初から被っていないく少し驚いた。

有翼人は色が薄いことを恥だと思う。そのため色素が薄い民たちはフードを被って生活をしているのだった。

老婆は色素が薄い茶色だった。これでは普通被っているものだが、ちらりと後を見るともう一人の連れがいた。

こちらは深くフードを被っていたため、こちらの連れにフードを与えたのだろうか、と思っていた。

「名を」

「私はソフィア、そして孫のジェシです」

片腕のないジェシにフードを脱ぐように言い、2人は並んでロツツイとブライトと向き合った。

「では翼を」

バサツと小さい、そして後ろが透けてしまっほどの薄茶の翼が2枚ひろがった。

それを手元の用紙に書き込んで、別の扉へと向かわす。

ロツツイはジェシと名乗る片腕が無い子供に痛々しい眼を向けた。子供は無邪気な笑顔で祖母を見ている。

このような小さな子供を見て思う。

本当に自分は正しいことをしているのか、自分は民を守るために黒の騎士に入ったのではないのか。

「副隊長」

ブライトの言葉にはっとした。

「次」

「・・・」

だが次の民はいくら呼んでも動こうとしなかった。

「おい、早くしろ」

もともと短気な性分に加え、朝から続いていた審査だ。自分の思い通りに進まぬことがあると苛立たしい。

「この方は入団希望者ですよ」

先ほどのソフィアと名乗る老婆がそつと教えてくれた。

「蛍子さん、道中ありがとうございました。またお会いできましたらお声をかけて下さいね」

「お兄ちゃん、ばいばい」

2人がそろって目の前の人物に手を振りながら横の扉へと消えた。

「なんだ、正門からはいればよかったものを。まあいい、ここで検査するか。どうせ、お前たちで終わる」

後数十人という程度の列が見えた。

「じゃあフードをとって」

ブライトがやっとそれらしいことをし出した。

多分、眼の前のフードを被っている入団希望者に興味が惹かれたのだろう。ブライトは興味のあることしかない。

切れ長の瞳が輝いている。

だがいくら待っても目の前の人物は動こうとしない。

「おい、後がつかえる」

もう待っていられなく無理やりフードをはぎ取った。

——その瞬間、息をのんだ。

フードからこぼれ落ちた、これでもかという黒く艶がある長い髪。夜空のように暗い、瞳。

太陽の光など浴びたことがないような白い肌。驚きの余り、眼がこぼれそうなほどに見開いていた。

「今日のルーキーはやるね。絶対に副隊長まで上り詰めるんじゃない？」

ブライトがにやにやと言葉をなくすロツツイを見た。

「ふん、色がこれでもな。翼を見ないには何も言えん」

「おっと早くも宣戦布告ですか。ロツツイ、副隊長の座、危うし」

「黙れ、おい小僧。早く翼を出せ」

だが何の反応も示さない。

「あーあ、ロツツイが怖がらせるからだよ」

「ふん、こんなもんで怖がれちゃこの先やってけねえぜ。おい、しっかり立て。全く女みたいに細い奴だな。こんな軟弱な奴じゃ無理に決まっている」

腕をつかんで、ブライトの方へ向き直らせた。男は本当に脆弱な感じだった。簡単に捻り上げられる白く細い腕。小さく震えていて罪悪感を感じたがブライトに引き渡した。

「ブライト、やれ」

「はいはい、あれこの子震えてる。可愛いな、その表情とってもそる」

ブライトが気味の悪いことを言ったためか、それともブライトに身の危険を感じたのか逃げようと手足をばたつかせた。

「ちょっと逃げちゃ駄目だよ。これから僕たちと付き合っていくには必要なことじゃないか」

「悪趣味が」

「つやだあー!!」

やっと声をあげたと思ったら、まだ声変わりもしていない高い声だった。本当に男か、と疑うものだが目の前の漆黒の髪と瞳を見て男だと知っている。

「この子、子猫みたい。本当に志願者かな？繊細な女の子にしか見えなんだけど」

ブライトは背中に手を当てた。

——ばさっ、眼の前を白い純白の翼が覆っている。

普段ロツツイはあまり驚くことはないのだが、この時ばかりは眼を見開いた。

ああ、なんて綺麗なのだろう。

そんな女々しい言葉しか思い浮かばないのだが、この翼はその言葉がぴつたりと似合う気がした。

だが、男は勢いよく身を翻していた。背中から翼を出しながら、王座を背に近くドアを開けて逃走した。そのことにより、はつとする。

「おい、ブライト」

ブライトも茫然としていたがロツツイの言葉に我に返った。

「ロツツイ、今の見た？」

「ああ」

「信じられない。あの純白、そして何より8枚羽」

王宮で最も素晴らしい翼の持ち主は6枚羽の太陽様だ。だが今のは太陽様を凌ぐほどの翼の大きさと美しさであった。

「今から、全隊に連絡する。ブライト、お前は奴を追え」

「了解」

久々の愉しみにブライトは舌舐めずりをした。

軽快に走っていくブライトを見届けてロツツイは全隊長に連絡を取り始めた。

そして、もう一度2人が出て行った方へ眼を向けた。

挿話（１）（後書き）

寒いですねえ

私、神経末端冷え性のため、指先が半端なくヤバイです
パソコンうちにくす

異世界（3）

王宮内を走る音が木霊する。軽快な足音ではなく、まるで何かに追われているような焦りを含んだ足音。

当然だ、蛭子は追われているのだから。

逃げなきゃ、逃げなきゃ。助けて、兄さん。

「っはあ、ぜ・ふ、ふう」

息の仕方を忘れたように不規則な呼吸が続く。だが、足を止める訳にはいかなかった。捕まったら何をされるのか分からない。言いようもない不安が胸を過ぎる。

途中で運度不足の足がもつれ何度も転び、そのせいで翼は消えたようであった。どうしてか、と考える暇もなく走り続ける。どこかに出口があるはずだ。

走りながらも自分を非難する。

なんて愚かなのか、どうして気付かなかったんだろう、皆、同じ髪と瞳をしていたというのに。

兄さんに教えてもらったというのに、自分はそれを見落としていた。近くにありすぎたからだろうか、そうと言っても自分の迂闊さに呆れて笑いすら出てくる。

なんて馬鹿なんだろう。

曲がり角を勢いよく曲がった途端、誰かに正面衝突した。

「たあっ！」

「おっと」

鼻を押さえて眼の前の人を見上げた。

蛍子が身体ごとぶつかったというのに眼の前の人物は何の衝撃も受けていないようだった。そして片手で蛍子の身体を支えていた。

「大丈夫かい。気をつけて」

「すつすみません。お怪我はありませんか」

つい反射的に敵か味方も分からぬ人を心配してしまった。

「おや」

相手はまじまじと蛍子を頭のとっぺんから足のつま先まで見た。

まずい、咄嗟に逃げようと思うが腕を腰を掴まれている。

「なんだ、黒のじゃないか。もしかして新人？」

蛍子の腰から手を離してそっと立たせた。

「は、はい」

「そうか、だからこんなに慇懃丁寧なのか」

一人で納得している人物をゆっくり見た。

薄い赤色の髪と瞳をしている。髪は長く、腰まであるため女かと思ったが声を聞いて男だとわかった。

だが先ほど、玉座があつた部屋にいた黒い翼をもった人達とは少し違った服装をしていた。

「もしかして練習がきつくて逃げ出した、とか」

「はい、じゃなくて。いいえ、違います。急ぎの使いを頼まれているんですが迷つてしまつて、すみませんが裏門はどこにあるか知りませんか？」

呼吸を整えながら蛍子は外に出る道を怪しまれてないか、ドキドキしながら聞いた。

顔つきから切れ者だと窺わせる彼に嘘が通じるか不安だった。

「ああ、もしかして新人いびりかな。ブライトがやりそうなことだね」

「いえ、そういうのではないのですが」

「いい子だ」

ほん、と蛍子の頭に手を置き子供を扱うように頭を撫でる。

「あ、あの」

どうすればいいのか、息切れにより酸素が充分脳に達していない頭で考えるのは難しく、全く身動きができなかった。

「いいよ、途中まで一緒だから案内してあげるよ」

「ありがとうございます」

本当は一人で見つからないように行きたかったのだが、好意を無下にすることもできず引き攣った顔でなんとか答えた。

「私はアカシという、君は？」

「・・・蛍子です」

偽名を使おうか考えたが、別に損得はないと思い本名を名乗った。
2人はゆっくりと歩き始めた。

+ + +

なんとか蛍子の呼吸も落ち着き、アカシさんと一緒に会話をしながら歩いているときだった。

眼の前から黒髪、黒目の男がこちらに向かってきた。

蛍子は咄嗟に近くの扉にアカシさんにはれないよう、こっそり身を潜ませた。

「アカシ、伝達は来たか？」

「おやクツキ、伝達、ですか？ 来てないと思いますが」

「先ほど副隊長から連絡があつたのだが、ある少年を探しているらしい」

「ある少年ですか」

アカシは顎に手をあて考える仕草をした。

「これは、ごく一部だけの話だが、その少年は漆黒の髪と瞳にかかわらず、翼が白かつたらしい」

はつと蛍子は息を飲んだ。・・確実に自分だ。ああ、というか何で皆して少年というのだろうか。蛍子は自分が追われている身だといふのに違つところで茶々をいれる。

「しかもロツツイの話によると8枚羽だつたそうだ」

「8枚っ!？」

「ああ、その少年を捕まえろとの命令だ」

「・・その少年、髪は腰まであり、女のような美丈夫な子で名は蛍子ですか？」

「そこまでは知らん。映像を送るから見ろ」

クツキが手のひらをアカシの額に翳してすぐに離れた。

「ああ、やっぱり。この子その扉の影に隠れてる子ですよ」

「!？」

何故、そこにいと分かったのか、考えることもせず扉の影から飛び出して反対方向へとまた走り出した。

「追いかけないのですか？」

アカシは蛍子が曲がったのを見届けてクツキの方へちらりと眼を移した。

「どうせ追跡呪文でもかけたんだろ」

「おや、ばれましたか」

悪びれもせずにアカシは飄々とした態度で微笑した。

蛍子には悪いが、初めて会った時から怪しいと思っていた。あの隊長格なみの漆黑さで新人いびりなんて行われたい、というか怖くてできないだろう。やり返されるのが関の山だ。

だからアカシは黒の騎士団へと連れて行こうとした。まさかクツキに会うと思っていなかったが一応、追跡呪文を頭に触れてつけておいたため、蛍子がどこにいるか手に取るようにわかる。

「本当、性格悪いな」

「いえいえ、お褒めに預かり光栄です」

「褒めてないが」

皆に分かるよう、思念に魔法をのせて蛍子の位置を共有する。

「可愛い良い子だったんですがね、世間知らずの子でしたね」

アカシは蛍子の顔を思い出してクス、と笑った。

「本っ当、性格が悪い奴だ」

クツキの呆れた声で更にアカシの笑みが深まった。

異世界（3）（後書き）

頭がいたいー！！

駄目だ、皆さん今まで支えてくれてありがとう
もう作者は頭の頭痛のため寝ます・・・

異世界（4）（前書き）

久しぶりに自転車に乗ったら呼吸がやばい
空気も入ってなかった状態だったから更に疲れた・・・

異世界（4）

駄目だ、息がもたない、心臓が壊れそう。

全力で走ったのは何年ぶりだろうか。いや、全力で走ったことなどないではないか。いつも木の陰がある場所に座って皆が苦しうに楽しそうに走っているのをただただ見ていただけだった。

とりあえず後方からの足音が聞こえないため近くの扉を押し、誰もいないことを確かめ中に入った。

まだ心臓の拍動は不規則で顔も唇も真っ青である。
今にも倒れそうであった。

「つつ…はああ、死に、そう」

でもまだ死ぬわけにはいかない。
兄に一発報いなければ、死んでも死にきれない。

なんとか呼吸を整え中を見渡した。

どうやら協会のようなのだ。太陽の光が降り注いでいてさらに神秘的な雰囲気醸し出していた。光が壁に反射して更にいくつもの光を生み出す。

まるでここだけが違う空間のように感じられる。

——綺麗、だ。

今の状況も忘れ魅入っていた。

だが不意に後ろの扉が開く音がした。

「つつ、誰!？」

ドアから顔を出したのは綺麗な金髪をした少年だった。

相手の顔を確認するよりも早く逃げようと辺りを見回したが出口がない。唯一の出口には、その青年がいる。

絶対絶命だ。まだ整えきっていない呼吸がさらに乱れ出し心臓が悲鳴を上げている。

「君、黒の?」

「く、黒?」

「黒の騎士団の隊員でしょ。でもそんな綺麗な黒髪は見たことないな。もしかして新人?」

そうか、と勝手に頷きながら蛍子の頭を見た。

「ん、何したの? 君、追跡呪文がかかってるよ」

「追跡呪文?」

もしかして頭をアカシという男に撫でられた時に何かされたのか、けれど何の感じもしなかったと思う。

「もしかして逃げてたり?」

ぎくりとした。彼も自分を捕まえるのか。だがもう逃げられないと分かっている。心臓が針で刺されているように痛いし、何年も運動していない足はがくがくしていて、もう一步も動けない。

「だったら何かしら？ 捕まえるって言っの？」

可愛らしい少年に無駄だと思ったが虚勢を張ってみた。何もしいよりはましだ。

自分よりも歳が低い子を睨むのは若干、胸が痛んだがなり振り構ってられない。

「逃がしてあげようか？」

「えっ？」

その言葉に心踊るかせたが怪しげに見つめる。

彼が私を逃がして何の得がある？ いや得など無い、得がないことをするものか。

彼の温かな金色の瞳と視線を合わせた。

だが後ろから鎧がぶつかり合う音がした。

まさか、そう思うが確実に音はこちらに迷いなく近づいている。

「どうすれば・・・」

「こっち」

少年が蛍子の腕をとり部屋の隅へと向かう。

「なっ・・・」

蛍子の抗議も虚しく彼は壁に掛けてある太陽と天使が描かれている絵画はずした。

がちゃん、何か鍵が開く音がする。

「この絵を外して、隅の壁を3回叩く。そして元の位置に絵を戻す」
そうすると隅の床が人一人分がやっと通れるような隙間が出来た。
それは階段になっているが、先は真っ暗で何も見えない。

「これは！」

「隠し通路だよ。いいかい？ この階段をまっすぐ降りる。そうすると3つの道がある、右と真ん中、そして左だ。まず左の道を行く、そして壁に沿って歩いて4つ目の角を右に。次に2つ目の角を左、また2つ目の角を左だ。そうすると大きく広がった道に出る。そこに7つの道がある、左から3番目と4番目、一番右は止めておいた方がいいよ。それ以外なら外に出られる」

さあ行つて、彼は蛍子の頭に手を乗せ優しく微笑んだ。

10位の歳のくせに大人びた少年に驚きを隠せない。

「な、何で」

「うーん、慈善活動中だからかな？」

彼の瞳を見ると嘘はついていないと思う。だが信用していいのか、先ほどのアカシとのやりとりが思い出される。

不安が出ていたのか彼は苦笑しながら蛍子の頭に手を置いた。

「多分、少しの償い」

「償い？」

「そつ、さあ早く行つて。彼らが来るよ、追跡呪文は消しておいたから大丈夫だよ」

「でも、君が」

「僕は大丈夫、何とかなるよ」

本当だろうか、優しい彼にあの兵隊たちに勝てるのだろうか。そんな細い腕で、そんな小さな身体で。

だが時間が無い。足音がだんだん大きくなっている。

「ありがとう。私は椎名蛭子、あなたは？」

「オリンだよ」

オリン、心の中にその名を刻む。

もう一度ありがとうと言って暗闇の中に身を躍らせた。

異世界（4）（後書き）

車庫に自転車を入れてたため
持つところが真っ黒でした〃自分の手も黒くなった・・・

挿話（2）（前書き）

テスト期間中？
そんなの気にしない

挿話(2)

「なーあ、なーあ、なーあ」

「うるさい、お前の妹のことなら手を打つただろう」

フレゼリクが机に溜まった書類と向き合っているのに対し、太陽はフレゼリクのベッドに寝ころび枕を抱えて唸っていた。

それはフレゼリクの枕なのだが、と思ったが口には出さず新たな枕を作らせようと決めた。

一緒に来たはずの妹が見つからない。

多分、こちらの世界に来れたのだろうが、このオエリフィア大
国で黒髪の少女を見たという報告は上がっていない。

もしかして『天』の方に行ってしまったのかと不安で一杯だ。

「そもそも、お前の妹がこちらの世界に来れたという確信は無いの
だろう。この国の救世主として選ばれたのはお前だけということさ」

「なーあ、やっぱり俺も探しに行っていないだろ」

思い立ったら即行動の太陽はベッドから飛び起きて部屋から出ようとする。

「待て、お前が今出て行ったら、この国はどうなる。お前のせいで
何万もの人が死ぬかもしれんぞ」

「う、でも妹が、蛭子が心細い中、俺をまっっているかもしれないし」
「かも、だろう。だから貼り紙をして探しているだろう」

といっても絵心のない太陽が書いたために貼り紙は意味をなしていない。なぜなら、丸い顔に黒く塗りつぶした目、口は線で結ばれ、鼻はこれでもかというほど大きく、髪は黒で描かれているだけだ。子供が描いたほうがまだ分かるというものだ。
実際に蛭子が見たら烈火のごとく怒っていただろう。

「でも見つからないんだぞ。この3日間、その間蛭^{けい}が、蛭^{けい}があ」

太陽がベッドの上で大の大人が情けない声を出している。

「失礼します」

控えめなノックと共に濃紺の髪をした細型の男が入ってきた。

「またですか」

呆れた顔をした秀麗な男は中の2人に顔を向けた。
そして手に持っている書類をフレゼリクの机に置いた。

「ルシア、蛭^{けい}が、もしかしたら野蛮な男共に掴まってるのかも。い

や、あまりの可愛さにどっかの貴族が蛍子を隠してるかもしれない。俺は、おれはどうしたらいいんだ」

「落ち着きなさい、太陽。君の話だと蛍子殿はとても勇敢で聡明な女性だろう。なら、どうにかして太陽に会おうとしているだろう」

ルシアと呼ばれた濃紺の長い髪を鬱陶しげに耳にかけ微笑みながら太陽を見つめた。

彼の名前はルシオールだが、言いにくいと太陽がルシアと呼ぶようになった。

「だけどき、もし『天』に行ってたら、ぐわああ、蛍子お」

2人はもう太陽を放っておこうと目配せをし合った。

フレゼリクは思う。

たかが小娘の命はフレゼリクが治めている国の民の一人分の命にも匹敵しないと。

なのに太陽は何故あんなにも悩むのか、太陽は『天』との戦が近い。ため搜索には行かないがもし暇になったら自分の制止も聞かずに飛び出して行くのだろう。

この俺を置いて、この国を置いて。

ああ、だから太陽の妹が憎い。俺からなにもかも奪ってしまうお

前が。

ルシオールはフレゼリク専用の枕を抱えている太陽を横目で見た。

本当に妹を溺愛しているんだな、本当に羨ましい兄妹愛だと思っている。

ルシオールには家族がない、だから太陽の妹の話を聞いていると自分まで妹がいるような気分になって、顔も知らない蛍子を守りたいと思うようになった。

太陽が妹について語る時は戦時中には見せない穏やかさと愛情がいつも見える。

私もいつか会ってみたいものだ、蛍子殿に。

彼女はどんな表情で笑い、どんな声で言葉を紡ぐのか、期待に胸を躍らせて窓から曇っている空へと眼を向けた。

三者三様の思いを抱えたまま今日もオエリフィア国はどんよりとした天気のまま一日が過ぎる。

挿話（2）（後書き）

だつて疲れたんだもん
↑

異世界（5）

——急に視界が開けた。

暗闇だけだった世界から一気に光が見えたために外に出た瞬間、目が眩んだ。

慣れた目で辺りを見ると目の前に広がるのは一面の緑。森が広がっている。

ここからどうやって地上に降りばいいのか、太陽に会うにはどうすればいいのか。

道という道も無い。

蛍子は辺りをうろつろした。

すると低い木の茂みに獣道があるのが分かった。

「道も分からないし、行ってみる価値はあるよね」

先ほどよりは幾分落ち着いた心臓の上に胸を当てながら深い呼吸をして額の汗をぬぐった。

+
+
+

何分か歩くと獣道は清涼な水が流れている小さな川に辿り着いた。

「水だ！」

ちゃんとした水を飲むのは久しぶりで、なり振り構わず手で冷たい透明な水をすくって一気に飲んだ。

生き返る、せき込みながらも何度も掬って飲む。冷たい水が胃に入っていき全体に広がって行くのが分かった。

「これから、どうしよう」

口元を手で拭って立ち上がった。

川に沿って歩いていけば人に会えるはず、だけど有翼人の人にとって大丈夫なのか。

助けてくれる人は周りに誰一人としていない。

「兄さん」

この世界に一人しかない身内の名前を無意識に呟く。

日本にいた時はむしろ頼られていたのに一人になるとこんなにもネガティブになってしまうのか、なんだが自分がひどく脆弱な存在になった気がした。

「私は強い、そうよね」

自分に言い聞かせるように両手に力を入れた。

——ガサツ、不意に茂みが揺れた。

「だ、誰？」

決意がいきなり打ち砕かれそうだが、だが勇気を振り絞って身構える。

しかし杞憂だった。

茂みから顔をだしたのは小鹿だった。しかも後ろ脚にひどい怪我を負っている。

「なんだ、君か」

手で招いた。

始めは警戒していたが尚も招く蛍子に恐る恐る近づいた。

「いい子だね」

つぶらな瞳が涙で潤んでいる。

蛍子は動物の温かさに少しだけ癒された。蛍子は小鹿と同じ高さに屈んで顔を撫でてあげると小鹿は気持ちよさそうに鳴いた。

「あ、怪我してるんだったね」

大丈夫、何もしないからと言いつつながら、そつと後ろ脚を持ち上げた。

ポケットに入っていたハンカチを脚に取れないように、しっかりと巻いてあげた。

「これでいいかな。ふう、これが昔話だったら君は私に何か宝をくれるんだけどね。そんなものはいらなから誰か人がいるところに

連れて行ってくれない？ 贅沢をいうなら無条件に私を匿ってくれ
るところがいいんだけど」

そんな訳ないと自嘲しながら背中を撫でた。いやはや欲が強すぎる。ただ小鹿には側にいてくれるだけで安心するのに欲を言ってしまうなんて。

すると小鹿が蛭子の服の裾を引っ張りだした。

「え、何どこに行くの？」

後脚をひょこひょこさせながらも蛭子をどこかに連れて行こうと一生懸命引っ張った。

異世界（5）（後書き）

本当に我慢しなきゃ！！

って訳でテストのためにちょっとお休みしまふ

異世界（6）（前書き）

これまでの小説をかなり改正しました。
なので、最初から読んだ方がいいかもしれません・・・
すみません、すっごい訂正しました

異世界（6）

バンビちゃん（勝手に命名）にしばらく連れられて行くと一気に視界が開けた。

「納屋？」

視界が開けた先には一軒の家、というより納屋の方が正しいのかもしれない。

外見は古い木で出来ていてドアの横には鍬が立て掛けてあった。だが納屋とも家とも分らない場所に人が住んでいるのかと思っただが家の横には小さな手入れされた畑が見える。多分自家栽培をしているのだろう。

「本当に連れて来てくれたんだ、ありがとう」

バンビちゃんの頭を撫でながらこの異世界では動物と言葉が通じるのだろうか、ふとそんな非常識なことを思った。

だが扉を叩いていいのか迷う、ここにいる人物は何人住んでいるか分からないが有翼人だろう。幸い私は瞳も髪も黒だから行き成り殺されはしない、と思う。

ただ王宮で何かしらあつた場合は捕まるかもしれない。魔法はどこまで便利か分からないがアカシさんと会った男は何かを送って私を特定したのだ。

なぜ自分は追いかけられたのだろうと冷静になった今、やっと考える。多分というか絶対、背中に生えた翼のせいだろう。

生まれてこの方自分は人間だと思っていたが・・だけでもしかなら、あの黒い翼が生えていた人達の魔法とかいうもののせいか、きつとそうだ。

でも何故だろう、そういえば兄さんが言っていた気がする。有翼人は髪も瞳も翼も同じ色だと。さっき魔法によって出た私の翼は白だった。だからか、異端だから？

流石に頭が混乱してきた。

ひとまず頭の中を整理しよう。

まず私は『天』にいる。それは確実だ。そして周りは見知らぬ人ばかり、味方はまずいないと考えていいだろう。『天』には有翼人がいて、有翼人は瞳、髪、翼が同じ色だ。けど私は黒い瞳、黒い髪、白い翼だった。

王宮に入ったら黒い髪と瞳、翼を持った人がいて彼らは黒の騎士団と呼ばれているもので、私はその新人と間違われた。

・・やはり訳が分からない。けれど王宮にいた黒い翼の人達は私が翼を見せるまでは私を有翼人と思っていたはずだ。

けれど厄介な問題がある。

色が濃い、つまり市民が持っているような薄い色の髪と瞳を持つ

てないことだ。濃い色ほど力が強いって言ってたけど私にはそんな力は無いし、こちらの世界に来てても何の変化も身体にない。

髪染めも無いし、どうすればいい。

このまま目の前の家にお邪魔しても確実に怪しまれる、けれど町や村などの人がいっぱい集まってる方が不味いはずだ。

駄目だ、冷静な判断をするにはもっと情報がいる。なんで大切なことをしっかり話しておかないんだ、あの馬鹿兄。

「もう嫌だ」

だが涙を流すわけにはいかない。

涙は弱い証だ、流しても何の解決にならない。ただの流し損になる。

「おい、入るのか入らないのか」

パニックになっている蛍子にぶっきらぼうな声がかかる。

はっとして振り向くと扉を開けた茶色の髪をしたお爺さんが蛍子を見つめていた。髭まで茶色だ。気難しそうな顔をして口を曲げていた。

だが驚いたのは彼の瞳だ、瞳が灰色だった。髪と瞳の色が違う。

「『地』の人？」

「ああ、そうだ。お前は黒の騎士団だろ。怪我をしてるなら入れ」

そのまま自分の家に入っていった。
扉は開かれたままだ。

蛍子は意を決して薄暗い家の中に入った。

異世界（6）（後書き）

これからも、ちょこちょこ直していくので
えっ、こんな設定あった？

と思う方は申し訳ないのですが最初から見てください
私の力が及ばず。。すみません！！

異世界（7）（前書き）

この医者の名前は一番に浮かびました
やっぱゲンさんだよね

異世界（7）

部屋は棚があり、そこに瓶が置いてあって中に草が入っている。

多くの瓶に色々な種類の草があるため、目の前の人は医者なのか。

「早く見せる」

「あつ、はい」

信用していいのか分からなかったが、とにかく休憩したかった。
全速力で走り続けていたため、嫌な汗が出ているし足がガクガクしている。

簡素なベッドに座りながら足を見せた。

ずっと靴下だったため、擦り傷があちこちにある。

靴下を脱いで素足をさらした。

「・・・」

「・・・」

相手が無言のため蛭子も無言になるしかない。この人、無口だ。
絶対頑固に違いないと治療してもらっているのに失礼なことを思っていた。

態度が大柄な割には手際が良く、すぐに終わった。

「ありがとうございます」

「次」

「えっ？」

「顔色悪いぞ」

鏡が無いため蛍子は自分の顔が確認できないが蛍子の額には脂汗が出ており、顔は真っ青で唇は紫色だ。

だが走ることに夢中だった蛍子は気がつかなかった。

「心臓」

そう言うなり蛍子の心臓の上に手を置いたと思ったが、ぱっと離れた。

いきなり離れたので蛍子は驚いて心臓が痛くなった。

「な、お前、女か？」

「え、ええ。そんなに男に見えます？」

会う人会う人に男、男と言われたら傷つく。

男らしくないように髪を腰まで伸ばしているのに、そんなに自分は男らしいのか。

「お前、本当に黒の騎士団か？」

急に顔が厳しくなった。怪しい者を見るように蛍子を見つめ距離

をとつたが直ぐに近寄つた。

「おい、大丈夫か。とにかく心臓を診せろ」

蛍子の顔が更に悪くなつたため医者として心配したのだろう。
きつと根はいい人なのだろう、蛍子は痛む心臓を押さえながらも
思つた。

その後、今度は慎重に心臓の上に手を置き心拍を測つた。
心拍が弱々しい。

立ちあがつて瓶の中の薬草を出し、すり潰しながら他の薬草も混
ぜる。

ごりごりとすりながら蛍子を肩越しに見た。

「飲め」

粉となつた薬を蛍子の目の前に持つて行つた。

「粉薬・・・」

明らかに蛍子の眉が寄つた。粉薬が嫌いだと顔にはつきりと書い
てある。

だが心臓が痛むのだろう、一気に口の中に入れた。

「心拍を整えてくれる」

「重ね重ねすみません。あの、お金とか・・・」

「いらん、いいから早く出て行つてくれ」

だが蛭子はベッドから動かない。

男は嫌な予感がする、と背を向けたが蛭子は一向に動こうとしない。

「お願いします、ここに置いて下さい」

「嫌だ」

「治療費を払ってないんですよ。働いて返します」

「いらんと言っている。それにお前みたいに細い奴にはできん」

「お願いします。患者を見捨てるんですか？」

「・・・」

全く、困ったもんだ。

こんな訳も分からない娘を置くなんて。

妻と一人娘に先立たれてからは独りの方が気楽だったのに騒がい娘が増えそうだ。

けれど生きていたら目の前の胸を押さえている娘と同じくらいの年齢だっただろう自分の娘と重なる。

ああ、全く困ったもんだ。

これはお前が与えてくれたものなのか。人との関わりを持てということだろうか。

溜息をつきながら薄汚れた天井を仰ぎ見る。

「儂はゲンだ」

「つつ、蛍子です。椎名蛍子です」

あからさまに嬉しそうな娘は無碍には出来ないな。
ゲンはそう思って得體も知れない蛍子を受け入れた。

異世界（7）（後書き）

遅くなりましたが宮さん、姫夜さん
メッセージありがとうございます。

他にも逆お氣に入りして下さった方、
すんごく嬉しす！です

異世界（8）

「僕は面倒事は嫌いだ。だが、一つ教えておこう」

そうゲンが切り出し蛭子の黒い瞳に視線を合わせる。

「黒の騎士団は男しかない。それが、当たり前だ」

「黒の騎士団って髪の毛や瞳、それに翼が黒い人達のことですよ。何故ですか？」

蛭子はゲンを会ってすぐだと言うのに信頼していた。

口が悪いけど自分を匿って面倒をみてくれるなんてお人好しだ。申し訳ないが自分がここでの知識を得るまでは匿ってもらいたい。自分は打算的だ、しかしこうしないとこの世界で生きていけないのだ。

「黒の騎士団、つまり黒騎士には男しか生まれてこない。過去に1人として女兒が生まれたことなど無かった。黒騎士は魔法にあまり優れないが体術は一般の有翼人の3倍、『地』の人の5倍だ」

そんな事もしらんのか、と目を向けられた。

はい、知りません。兄である太陽は肝心なことを教えてくれないのです、いや兄が忘れていたというだけだと思いますがね。

「もっと聞いていいですか？」

「あまり話したくないのだが」

ゲンは口数が少ない。生来大人しい性格だったが妻と娘が死んだことにより頑固さに磨きがかかって更に無口になった。

「太陽、様・・・って？」

『地』ではない太陽とは誰なのか。一緒に同行していた2人の顔が浮かんで消えた。

「太陽様とは、つまりこの国を治める女帝、アイリーン様のことだ」

「何故太陽様なんですか？」

「・・・」

すごい不審な顔で見られた。

だが蛭子は知らぬ振りをして答えを待った。だって知らないのだもの。

やがて根負けしたゲンが溜め息を深々とつきながら口を開いた。

「・・・有翼人は太陽から魔力を貰う。そのため太陽がないと生きていけない。だから有翼人は太陽を独占したがる。だがただの有翼人とは違って、女帝は太陽の光を浴びると全ての者を従わす力を持つ。その力は絶対だ。自分の意思とは関係なしに従わざるを得ないそうだ」

太陽から魔力、信じられない話だと窓から光り輝いている太陽を見上げた。

「えっ？」

だが普段眩し過ぎて直視できない太陽を見ることができた。
蛍子の驚き声にゲンも外を見る。

「・・・こいつは珍しいもんを見た。太陽代わりだ」

「太陽代わり？」

「ああ、女帝が退位するんだ」

2人が見上げた太陽は日蝕が行われている。ゆっくりゆっくりと黒い影が太陽を侵食している。

「初めて見た」

テレビで見たことがあったがこんなにも近くで見たことは無かった。

ここの太陽は地球で見るより2倍の大きさである、とても神々しい。とても壮大で周りの青い空を燃やすよう。

「儂もだ、女帝の退位や即位は太陽が決める。その太陽に選ばれた方が太陽様、つまり女帝となる」

「女帝？ 普通、男になるものじゃないですか？」

「いや、歴代の太陽様は全て女帝だったそうだ」

黒も騎士団は男だけ、太陽様は女だけということか。

「じゃあ日蝕が終わったら女帝が代わった、ということですか？」

「そうだ、女帝が自分の証を見せることによって太陽が顔を出すと
儂も聞いた」

「証？」

「さあ、そこまでは儂も知らん」

肩をすくめて首を振った。

蚩子は太陽の下に出来た黒い染みを不安な面持ちで見つめた。

異世界（8）（後書き）

皆さま、本当にコメントやお気に入り登録ありがとうございます
これからも窓から雪を眺めながら書きこんでいきます

また、お返事は返すようにしてるので、ぜひぜひ送ってください

異世界（9）（前書き）

また改正しました、何度もすみません。

変わったのはソフィアとジェシの色と『地』の文官、ルシオールです

異世界（9）

「ゲンさん、また頼むよ。おうケイコじゃないか、今日も頑張れよ」

黒髪の浅黒い男に話しかけられた蛭子はターバンのようなものを頭に巻き、手には薬草が一杯入った籠を持っていた。

彼は蛭子を見つけると、いつものように頭をがしがしと撫でた。あまりにも強い力なので蛭子は顔をしかめながらターバンが取れないようにしっかりとおさえた。

ゲンが薬を調合している間に蛭子は必要な薬草を瓶から出してゲンに渡したり怪我人の包帯を変えたりして動き回っていた。

蛭子はお辞儀だけして彼が連れてきた黒髪の相棒にゆっくり座るように手を貸した。

ここは黒の騎士団専用の診療所。そのため黒髪の筋肉系の人しか来ない。

「まだ次の太陽様が現れねえな」

太陽はもう半分も黒く覆われている。

呟いた声を聞きとめた蛭子は首を横に傾げるだけだった。

「お、わりいわりい」

ここに置いてもらって早一ヶ月、ここに置いてもらう代わりに蛭子はゲンの仕事を手伝ったり、ご飯を作ったりした。最初はゲンも

断ったが老体のため、最近は満足に動かすことのできない身体には勝てなかった。

そして最初に決めたことは髪を隠す、だった。

蛍子の黒髪は濃すぎるし、ゲンはそもそも街に下りないため染料など持っていなかった。

次に口を絶対に聞かないことだ。そうすれば変に質問されることはないからだ。

最初、黒騎士に出会った時は驚きでつい口を開きかけたがゲンの容赦ない脛蹴りすねになんとか思い止まった。

ゲンは蛍子を自分の姪だと話し、一切の質問を受け付けなかった。ここに来る人はゲンの無口さと頑固さを分かっていたので蛍子にとっては好都合だったが、何も聞かないでいてくれた。

ただ彼女の名前は蛍子であり、『地』に追い出されたと聞かされただけだ。最初は不審に思ったが気配りが出来る蛍子をここに来る黒騎士の人たちは好ましく思った。

ゲンはただの治療しかしてくれないが蛍子は笑いながら包帯を優しく巻いたり、痛み止めを持たせてくれたりする。

やはり無口で痛い薬しか出さない医者よりも、明るい笑顔を見せる娘の方が男達は嬉しいのだ。

「ゲンさんもケイコが来てからは柔らかくなったな」

ゲンは話せない蛍子の変わりに、いつもより多く話さなければならなかった。

蛍子は分らないことは、すぐに聞き一度で覚えてしまう。そのことにゲンは驚いたが口うるさい蛍子をまるで自分の娘のように扱った。

ありがとう、と言うように蛍子はほころぶ様に笑う。

むさくるしい部屋に華があるだけで痛みが和らぐ気がする。

連れられた黒騎士の中で蛍子は噂の的となり、ほんの少しの傷でもゲンに見てもらおうとして蛍子を見に来るのだ。

だがゲンもそれを分かっているので、ただのかすり傷で来た男には激痛の薬を塗ってやることにしている。

だが、それでも来る男はいるので困っている。

「ほい、ケイコ。今日はお前の好きなカンザシの実を持ってきたぞ」

怪我人を連れてきたのは黒騎士2番隊の3席であるフツチエ。黒騎士2番隊は質実剛健で有名な隊だ。フツチエは蛭子を妹のように可愛がっている。そのため蛭子にもものすごく甘く今日も蛭子の好物を持ってきた。

カンザシとは赤い果物で中に黒い粒が入っている。皮は固くて食べれず、中の黒い粒を食べる。粒はチョコレートに似た味で蛭子は気に入っていた。

「また近くに戦争が起こりそうだ」

「またか」

「もしかしたら次期太陽様は『地』の方にいるかもしれないって王宮は気がたつてゐたんだ」

蛭子はカンザシの実を食べながら話を聞いていた。近々、『天』と『地』の戦いが始まるらしい、太陽は大丈夫だろうかと不安に思う。

「『地』には最近あの男がいるから危ないな」

「あの男？」

ゲンが怪訝に尋ねた。有翼人に匹敵する人物など今までいなかったはずだ。

「名前は知らんが俺たちと同じで黒髪で黒い瞳だそうだ。そいつが有翼人と同じ、いやそれ以上の力を持っているそうだ」

蛍子の持っていたカンザシの実が音を立てて落ちた。一斉に皆が振り向くため、蛍子は胸が苦しいというように蹲った。

「ケイコ、大丈夫か」

ゲンは顔色が真っ青になった蛍子に近寄り部屋で休むように言った。

蛍子は部屋の扉を閉めるとその場に崩れ落ちた。

—— 兄さん。

ああ、どうやったら太陽に会えるんだろう。どうやったら『地』に行けるんだろう。

兄さんは死なないで生きていてくれるだろうか。
ものすごく会いたい。会って無事を確認したい。

ここは遠い遠い雲の上、蛍子は太陽に会える方法も戦争を食い止

める方法も思いつかなかった。

異世界（9）（後書き）

今日はバレンタインですなv

皆さまは誰にあげるんでしょうかね。

えっ？ワタケヒですか？

・・・もちろん自分にです

異世界（10）（前書き）

ちよこぼ？みたいな生き物・・・恐ろしいよね

異世界（10）

「大丈夫か」

「はい、心配かけてすみませんでした」

黒騎士の隊員たちが帰った後に蛍子は部屋から出てゲンと自分の夕ご飯の支度をしていた。

「・・・」

ゲンは何かを言いたそうにしていたが蛍子はわざと気付かない振りをした。良心が痛むがゲンさんに言っても解決できる問題ではないと分かっているのだ。

気付いたとしても何を話せばいいのか。

ゲンに話せば少しは気が楽になるかもしれない、だが今まで甘えたことがめつたに無い蛍子は他人の手を借りる手段を知らない。

元より甘えるつもりは無い。

だから自分で解決しようと思っ鍋の中をかき混ぜながら考えていた。

戦争を終わらせるには必ず女帝が必要不可欠だ、だが蛍子は会う術がない。兄に連絡も出す手段も知らない。まさに八方塞がりだ。

だが待てよ、なぜ彼らは戦争ができる。それは接触があるからだ。

「そう言えば、ゲンさん。さっきフツチェさんがまた戦が始まるっ

て言っていましたね」

「そうだな」

「黒騎士の皆さんってどうやって戦うんです」

「魔法だろ、まあ、あいつらは余り得意では無いから『地』の人と同じように剣や弓を使うだろ」

「じゃあ、いい勝負なんですね？」

魔法が得意でないならば、体術だけならば『地』の人の方が優れている気がする。

だが予想は裏切られる。

「それは無いだろう、少ないが魔法に優れている貴族も参戦するし何より翼があるからな」

「翼？」

「有翼人はここから下界に下りて『地』に向かう。翼があるってことは疲れたら直ぐに空に上がれるし空を自由に旋回できるから弓が当たらないだろう」

やはりここから『地』に行くには自分の翼で行くのか。つまり自分が出来ることは『天』の上でだけだ。

女帝には会えない、出来ることと言えばここに来る黒騎士の人達の話聞いて現状を把握することだけだ。

いや、きっと何か出来ることがあるはず。蛍子はそう思って自分

の手を握り締める。

+ + +

翌朝、誰かが扉を叩く音で目が覚めた。聞いたこともない動物の鳴き声と複数の話し声が聞こえた。

蛭子はベッドから起き素早くダーバンを頭に巻いて扉を開けた。ちょうどゲンも起きたらしい。後ろから息を呑むゲンが分かった。

扉を開けた先には金髪の着飾った男の人がいる。

指のあちこちにゴテゴテしい指輪がいくつもはめられている。それで人を殴ったら痛いだろうなと思った。

「・・・？」

蛭子は話せない振りをしているので首を傾けて相手が話すのを待つ。

だがいくら待っても目の前の人物が言葉を発することは無かった。

「こんな処までどうなさいましたか？」

どうやらゲンの知り合いらしい。

ゲンが蛍子の前に立とうと蛍子の肩に手をやり後ろに、下がらせようといつもより強い力で引っ張った。

だが同時に金髪の男に手を握られ思わず相手を見つめてしまった。にやりと笑う男の心情がよく分からない、何故会ってすぐに手を握られるのだろう。もしかして、これが『天』での挨拶かもしれないと思ったところだった。

「なっ・・・！」

ゲンがいつもより青い顔ですぐさま蛍子を引っ張った。その拍子に握られた手が離れた。

「何だ、同族か」

「・・・？」

面白そうな顔をした男に蛍子は首を傾げながらこの男には近寄ってはいけないと本能が告げていた。

「アテラス皇子、何てことを！」

「別に『地』の奴だとしたらゴミを一つ減らすだけになるだろう」

むしろゴミなんか無くなった方がいいと言った。

蛭子は一瞬で理解しゾツとした、自分が『地』の人であつたら殺されていたと。

あの男にとって『地』の人はゴミ、いやそれ以下であるだろうと。

「部屋に行つてなさい」

珍しくゲンが険しい声で促した。

蛭子は男の舐めつくような視線を感じながらも部屋に戻り、扉から聞き耳をたてたがくぐもって上手く聞こえない。

外から中を窺おと裏口から出た。

窓から様子を窺う。なにやら言い争っているようだ。いつもしかめているゲンのはずなのに今日は顔を真っ赤にして怒っている。そのため聞き取れる単語があつた。

毒草、依頼、そしてゲンの拒否。繋げると彼が誰かを殺そうとゲンに毒薬を作るように言っているようだ。

もつと聞こうと身を乗り出す。

あまりに必死になつて部屋を窺っていたせいか、後ろで不自然に草の音がしたのに気付かず、自分の影にもう一つの影が差したのにやっと気づき後ろを振り返った。

「つつ・・・！」

悲鳴を出さなかつた自分を褒めたい。

蛭子の鼻につきそうなほど近寄っていたのは鳥のような生き物。

二本足で立っていて蛭子よりも体がでかい。頭より大きい嘴は蛭子などひと飲みできそうだった。鞍が着いてあるのを見ると馬のよ

うに交通手段として活用されているのだろう。

「ぐえ」

鳴き方が恐ろしいほど可愛くない。

その見たことも無い生き物は蛍子に身を寄せ、体をこすりつけてくる。

小さい雛や鶏だったら可愛いのだろうが、大きい生物がやっても全く可愛くない。むしろ生命の危機を感じる。

「ぐーえ、ぎゆるーえ」

自分より大きい動物に触られていることに恐ろしくなり逃げようと家の正面を目指す。

だが曲がろうとした瞬間、反対側から人が来ていて、見事にぶつかった。

そのまま尻餅をつこうとする蛍子の身体を支えてくれた。

「おや、悪い。サヴェナ、どこに行ってたんだ」

サヴェナと呼ばれた生き物もとい鳥は鋭い3本足の鉤爪で地面を踏みしめながら勢いよく2人に突っ込もうとする。

あまりの形相に知らない人にしがみつく。

「待て」

すると興奮していた鳥が動きを止めたが落ち着こうとしない。

「どうした、そんなに興奮して」

「ぎゅよーわ、ぎょーえ、ぎゅーお」

「何だつて」

もしかして、いや、もしかしくなくても、この人、鳥と喋ってる！
蛍子はしがみついていた手を放し離れようとするが男が視線を鳥から外し蛍子を見つめる。

「悪いんだけどサヴェエナを撫でてやってくれないかな？」

「・・・」

顔が引き攣る。

無理だ、こんなでかい生物を愛でられない。動物愛護精神のある人ならできるかもしれないが、生憎蛍子はこんな大きな生物を愛でようとは思わない。

「大丈夫、噛まないから」

腰が引けていた後ろに下がる蛍子の身体を掴んで無理矢理、手を取られ鳥の頭へ持つていかれた。

想像したのとは違って黄色い毛並みは滑らかだった。

「きゅるるる」

この声を聞いてれば可愛いと思う日が来るかもしれない。
頭を撫でながら嘴を触った。

固い、これで一突きでもされたら死んでしまうかもしれない。

「な、平気だろう」

蛍子は頷いて両手で触った。

「こいつサヴェナって言うんだ」

初めて見た不思議な生き物に触る経験に心踊った。

例え、これが可愛くない声を出して大きな体を揺らしながら車と同じ速さで走ることが出来ると知っても。

異世界（10）（後書き）

想像上の動物ですから・・・

けど自分より大きな動物って腰が引けますよね

それなのに蛭子は撫でるってすげえ

虹乃だったらマジ逃げします！

異世界（11）

サヴェナを撫でていた蛭子に男は向き直った。
まだ若く見える彼は笑顔が優しく好青年だ。

「で、君は何者なんだ」

だが先程とは打って変わって男の纏う空気が鋭くなった。
目の前の男はやはり黒髪、黒騎士の人だろう。

けれどまだゲンさんの家で見たことは無い人だ。
もともと7番隊もあるわけだし、人数も数えきれない程だろう、
自分のことも細部まで行き渡ってないはずだ。

蛭子是指で家の中を差し自分を差す。
その動作を相手が分かるまで続けた。

「もしかして喋れないのかな？」

こくり、と頷く。
そしてまた家をさす。

「ゲンじいの知り合い？」

また、こくりと頷く。

「そうか、だけど君、有翼人だろう。なんでゲンじいの側にいるんだい」

たっぷり5秒間、間が開いた。

今、なんと？

私が有翼人ですって？

生まれてこの方、生粋の日本人なのだけでも。

だが脳裏に浮かぶのは王宮内でのこと。

今まで翼が出たのは彼らのせいだと思っていたが、まさか自分に原因があつたのだろうか。

すぐさま、そんなわけないと打ち消した。

何故ならあれ以来、勝手に翼が出ることなんて一度たりとも無かつたのだ、やはり彼らのせいだったのだろうと思う。

それに黒い髪はターバンに隠しているし、瞳も伏せているのであまり見えないだろう。それなのに何故彼は分かるのか。

曖昧に首を傾げた。相手がどうとってくれるか分からなかったが。

「そっか、何か事情があるんだね。さっきさ、皇子が君に触った時は驚いたよ」

何故、と人の良さそうな隊員に先を促す。

「皇子、指に感知機能がある指輪つけてるだろ」

だろ、と言われても何のことだかさっぱり分からない。感知機能？ 何のためにあんな重そうなごてごてしている指輪をしてるのだろう。あれは人を殴るための道具ではなかったのか。

「あれは黒騎士の第5番隊が開発したらしいよ。『地』の人を感知するものとして」

もしかしてと最悪の予測が思い浮かぶ。

「『地』の人だと分かった瞬間、触れた所から一気に燃え上がる。一瞬で灰になるほどの高熱だ」

この前、見ちゃったんだよねと男は続けた。

「この前、問者が黒騎士の中にいたようでした。何て名前だったか忘れたけど。髪と瞳を真っ黒に染めててさ分かんなかったんだよね。俺たちも毎日翼を広げてるわけじゃないし。結構歯がたつ奴だったから誰も気づかなかったんだ。けれど皇子が何気なく触ったら一瞬で灰になって驚いたよ」

いくらなんでも最悪だったと苦々しげに吐き捨てた。

人が一瞬で燃え尽きる、そんなこと現実にあるわけない。

その話が信じられなく冷や汗が背筋を流れた。額にも脂汗がうすうすら出る。もし私が『地』の人だったら・・死んでいた。

今更ながらゾツとした。心臓が嫌な音を立てて、体温が下がる。

急に怖くなって震え出した。

自分の世界では戦なんて無いのに、人が死ぬなんて滅多に無いこ

となのに。死がこんなにも身近に感じられる場所にいるなんて。そして、あの金髪の皇子が何とも思っていないように自分を殺そうとしていたなんて。

蛍子は初めてこの世界が怖くなった。

異世界（12）

突然黙ってしまった蛭子にどうしようかと慌てる。こんな話、年
もいかない女の子に聞かせる話では無かった。

「そう言えば君、話せないんだったよね」

急に話題を変えて静かになった空気を明るくしようと思うが、こ
の男は不器用なため話題の選択が間違っている。周りからは空気が
よめない男と常々言われているが自分では直しようがない。

普段はちゃんと突っ込んでくれる人がいるのだが、今はいない。

「咎落なんでしょ、だからゲンじいの処にいるんだね。俺はその選
択は間違っていないと思うけど、もし王宮に見つかったら大変だよ」

咎落とは何、どうして見つかると大変なの、王宮は人を助けにく
れるんじゃないの。ソフィアやジェシが女帝は素晴らしい人って褒
めていたのに。

「ぎゅえーぎよぎいー」

突然サヴェエナが喚き出し、大きな体を揺らす。

「・・・ああ、分かっているよ。ごめんね、そろそろ時間だ」

握っていた拳をゆっくりと開いていった。

サヴェナは嘴を蛍子の手のひらに押し付け、甘えた声を出した。

「本当に気に入られたんだね」

不安を隠せないながらもぎこちなく頷いた。

「咎落は王宮に連れていく決まりだけど君のことは見逃してあげよ。そうしないとサヴェナが怒るからね」

ウィンクをして自分もサヴェナに触り始めた。

二人から触られてサヴェナは一層気持ち良さそうな声を出した。

蛍子は自分の命を救ってくれたらしいサヴェナに感謝の意をこめて抱きついたのであった。

「また来る、その時こそは色好い返事を期待してるよ」

どうやら蛍子はサヴェナに気を取られていた間に話が終わったらしい。皇子の格好とは似つかわしくない家から出てきた。

サヴェナを撫でていた蛍子と思わず目があう。

お辞儀だけして中に入ろうと開いたままの扉に向かう。
だが進めない。服が掴まれていたのだ、サヴェナに。

「きゅるる」

「・・・」

ぐい、ぐいと嘴で引つ張られる。

「きゅう、きゅう」

「・・・」

どうやら無言の蛍子が勝ったらしい。
名残惜しそうな声を出し、何度も後ろを振り返りながらサヴェナ
は皇子の元に行った。

「おや、珍しいな。サヴェナが人を入るなんて」

「そうなんですよね。私も驚きました」

蛍子と話していた時とは違い丁寧な言葉で話しかける。
当たり前だと言ったらそうなのだが蛍子は少し不満を覚えた。

「お前、名は？」

「あー、この子は・・・」

名前を聞くのを失念していたらしい、聞いたところで話せなかつたのだが。

「・・・蛍子です」

「そうか。ではまたな、ケイコ」

皇子はひらりとサヴェナの背に乗って何か言いたそうな隊員を連れて去って行った。

蛍子は姿が見えなくなった瞬間、家に入ってしまった。

「ゲンさん!!」

椅子の上でぐったりしているゲンに駆け寄った。

「・・・大丈夫だ」

そう言いながらも呼吸が荒い。

いつもの発作だ。蛍子は瓶から薬草を出し擦り潰して緑色の粉をゲンの口元に持っていく。

「すまない」

ゲンは震える手で薬を受け取り一気に口の中に押し込んだ。

普段は何とも無いのだが興奮したりして呼吸が乱れるとゲンは発作を起こすのだ。

「ゲンさん、皇子は何て？」

「知らない方がいい」

それきり黙ってしまった。

疲れているゲンには悪いのだが聞きたいことがある。少し躊躇したが蛭子は口を開いてゲンに尋ねた。

「ゲンさん、咎落って？」

「黒騎士の奴らに言われたのか？」

ゲンの鋭い視線に戸惑いながら頷く。

「逆に仇となったか」

未だ震える片手で目を覆う。

「咎落とは生まれから身体の一部が無くなっていたり、身体上に障害がある奴らのことだ」

やはり、と蛭子は思った。

ジェシの時も同じように皆、ジェシの腕が無いのを軽蔑して見ていた。

「何で咎落って言うの？」

「・・・普通の人と違うからさ。人は自分と違う者を見ると嫌悪する。だから人と違った咎を背負い落ちていく者という」

ゲンは言いにくそうにゆっくりと話した。

「でも・・・」

そういう人は少なからずいる。

ゲンは頷いて先を重苦しい口調で進める。

「だからこの国はある措置をとった」

「もしかして『お恵み』ですか？」

ソフィアもジェシも言っていた。

働けない自分たちに仕事をくれるんだと。そして自分たちが働いた分、家族に支給されると。

「・・・表向きはな」

ゲンが吐き捨てるように言った。

「この国は咎落を無くそうとしている。ここには資源がたくさんある。広大な草原も、終わりが見えない森も。だが限りがある。そのため国が有翼人の制限を始めた。一家に子供は2人まで。それを破る奴は罰せられ・・・」

そのをに濁らせた。成人もしていない蛍子に話すかどうか躊躇っているのだ。

ゲんさんはぶっきらぼうな態度とは裏腹に本当はすごく優しい。だけど私は本当のことが、真実が知りたい。そうしないと何も分からないまま『天』で過ごしてしまう気がする。

「ゲんさん」

蛭子の目を逸らしながらゲンは答えた。

「咎落と老人は、殺される」

頭が真っ白になった。

異世界（12）（後書き）

KYきたー！

でもKYって空気よめない、空気よめるって言うけど
どっちが正しいんだろう

私はその、咎落みたいな人を差別してるわけではないのですよ（汗
むしろ自分たちより優れている部分があるので尊敬してるのですが・
・くっ、表せませぬ

こんな虹乃を許して下さい・・・

異世界（13）

—— 咎落は殺される。

関わりもない人の明日の糧のために。普通とは違うという理由だけで、もう老体で働けないというだけで。

「何ですって」

ソフィアとジェシの温かい笑顔が浮かんで、そして、すぐに消えた。

あの笑顔がもう見えないなんて。そんなの嘘でしょう。現実じゃないと何度も言うのにゲンさんは頷いてくれない。

じゃあ、城の前で並んでいた何人もの人達はどうなるのだろうか・・。何千人もいたというのに、その人達を全員殺してしまうのか。いや、しまったのか。

「腐ってる」

この国はおかしい。人の命をぞんざいに扱うなんて。

人は平等なのに。

「ああ、そうだな」

そう言うゲンにふと我に返った。

「何でゲンさんはここにいるの？」

こんな自国の人も他国の人もゴミのように扱う国に。先程の皇子だけではなく、城下で屋台の男がジェシに対してすごく過敏だった。そう皇子だけではなく、普通の人々までもが。

「・・・」

「ごめんなさい。言いたくないならいいの」

誰にだって秘密はある。蛍子は少し寂しく思ったが諦めた。

「いや、話そう」

まるで昨日のことのようだ。遠い目をして思い出を辿るように静かに話し始めた。

僕は『地』に生まれ、そして生まれた時から『天』と『地』の戦いを聞きながら育った。

そのため『天』に憎悪が湧くに時間はかからなかった。

その中で頑固で人付き合いが苦手な僕にも妻ができた。僕は反対でよく笑う妻でなあ、人から好かれていた。何で僕と結婚したか周りの人も僕も不思議に思ってたよ。

結婚して二ヶ月もたっていないころだ。

儂にも召集令状がきてな、この国のためにと心配していた妻を残して儂は出かけたよ。

儂はもともと医者だった。そのため軍医になったため戦場に出ることは無かった。だが傷ついた者たちを見て戦場の惨状を知ったよ。

結果は無惨だったよ。こっちは死者をあっちの倍の人数を出しながらの完敗だったからな。

だが儂は無傷で家に帰った。

帰った時はな普段は泣かない妻が大泣きしてな、宥めるのが大変だったよ。

しばらく普段と変わらない生活が続いた。

その中で妻は身ごもってな、儂は男だと言い張ったんだが妻がな女だって言い張ったんだ。

生まれてきた子は娘でな、妻はほらと得意げに笑ったんだ。

娘は太陽に愛された子、ティラーゼと名付けた。

あの娘はまだ一歳にもなっていないのに活発な子でな、あちこち動き回ってはよく怪我をしていた。目を放すとすぐどこかに行ってしまうてな、本人は隠れん坊のつもりだったんだろが、いつの間にか隠れてる処で寝ちまってな、儂と妻はいつも半乱狂に叫んで探したもんだった。

あの娘が立つ前にな、また召集された。

妻はまたつらそうな顔をしていたが儂は大丈夫だと何度も言って戦場へと向かったよ。

そこでもまた軍医だった。腕が良かったのを見込まれたらしい。儂は前回より危険な処に行っては治療し、たまに戦場に出たりもした。

儂は運が良かったんだろう。

今回もどこも怪我をしないで帰ってこれた。

帰ってこれたのに。

ゲンが言葉を詰まらせる。

「ゲンさん？」

蛭子がゲンの震える手を握った。ゲンの手は月日の苦悩が刻まれていて皺くちやだった。

帰ってきたのに家が無かった。

儂の家が、隣の家はあるのに。

儂は自分の目を疑ったよ。

妻はどこか、儂の娘はどこなんだ。

隣に聞くと何だか怯えた顔をするんだ。

尚も詰め寄ると王宮に行けと言うんだ。それきり口を閉ざしてしまつて仕方ないから王宮に行った。

・・そこで見てしまったんだよ。儂の妻と娘を。

二人共、首だけだった。

王宮の庭に知らない女の人と一緒に乗っててなあ、看板には罪人と書いてあった。

もちろん儂の妻は何もしてない良い妻だ。儂は王に合おうと開かない門の前で叫び続けた。妻と娘を返してくれ、と。

手の皮が裂けるまで叩き続けた。喉が枯れて潰れるまで叫び続けた。

そんな儂に門番が教えてくれたよ。

お前の妻はもう戦を止めて欲しいと訴えて殺されたと。何度の訴えにより罪人にされたのだと。

儂が家族のため、この国のためと死ぬ思いで戦っていたと言うのに、この国は民を守るところか殺したんだ。戦により食べ物値段も高騰する中、飢えることなど知らない王族は、戦の恐怖も知らない王はたった一言で儂の家族を殺したんだ。

妻は2人目の子が腹の中にいて、娘はやつと言葉を覚えたけどまだ儂の名前が言え無かったのに。

もうその声が聞けないんだ。

儂の愛した家族がこの腕に抱けないんだ。

だから儂は自分の国を呪った。滅んでしまえと。

儂が願った通り、采配も何もないその国は滅んだよ。

儂は行く当ても無くなって、ふらふらとさ迷っていた。どこかの森で倒れた時、死を覚悟した。

だけど目を覚ました時には生きていた。そしてここにいたんだ。
僕は全身包帯で巻かれていた、起き上がると全身に痛みが走った。
傍にいた黒髪の男がいた。すぐに分かったさ、長年戦ってきた相手だったからな。

でも僕は戦う理由を忘れていたんだ、もう国に従事する必要は無いってな。

男は名も名乗らず僕の世話を続けた。僕が『地』の人と知りながらな。

その時、僕の中にあつた有翼人に対しての偏見が消えた。

僕はその男に言つたさ、僕を助けてどうするってな。

男は言つた。

助けられる命を救つただけだと。

その言葉を聞いた時、僕はここで生きようと決心した。『地』への名残なんて全く無かつた。

だから僕は反逆者として『天』の下僕である証を身体に彫つてもらい僕はここにいます。

助けられる命を救うために。

異世界（13）（後書き）

ゲンさああああん！！

うおお、なんて悲劇なんだ・・・

異世界（14）（前書き）

若干シリアスなため遠慮したい方はどうぞ。
だが読まないで次に行くと意味不明になりますね・・・すみません

異世界（14）

全てを聞き終わった時、蛍子は泣いていた。滅多に泣かない蛍子が鼻を真つ赤にして溢れる涙を抑えていた。

「助けてくれた人は、その人はどうしたんですか？」

「さあ、分かん。儂が起き上がれるようになったらいなくなっていたしな。けれどいつかここに来た時、儂はちゃんと礼をしたい」

だからここで一人で住んでいたんだ。

奥さんと娘を守れなかった自分を責めて。

そして『天』の一員になったんだ。

けれど、どうやって『天』の一員になれたのだろう。有翼人は『地』の人が『天』を嫌悪するように『地』を見下している。

そんな『地』の人を仲間にするのだろうか。

「どうやって？」

ゲンは薄い上着を脱いで背中を見せた。背中には黒く刻まれた翼とそれを絡めとる鳶と太陽が彫ってあった。

黒い翼が今にも羽ばたきそうで蛍子は心が震えた。

「ゲンさん、何で戦はあるんでしょうね・・・」

ゲンがゆっくりと首を振る。

「僕は分からんよ。けどな、人は贅沢を求めるんだろうな。より良い生活を求める。」

「ゲンさん、私ずっと思ってたんです。何で戦はあるのか、どうして人は争うのを止めないかって。戦争の原因は名誉と退屈にあるんじゃないかって思います。ひとりを破壊することは法によって殺人者とされますが何千という人間を殺害することは見かけのよい名を与えられます。戦争は栄光の技術であり不滅の名誉を与えるものです。私は最も正しい戦争よりも最も不正なる平和を取りたい、です」

「ああ」

何で戦はあるのだろう、よりよい生活を求めるため、不況をなくすため、名誉のため、家族のため。

理由はそれぞれあるけれど、答えは一つではない。
昔から何千年と続く戦争、それはもはや人間の使命なのかもしれない。

「なんで戦争はあるんでしょうね」

「ああ」

もう一度、蚩子は繰り返した。

「だから僕は戦が嫌いだ。別に怖いという訳じゃない、ただ妻と娘のことを思い出すのでな」

「・・・ゲンさん、私、絶対にこの『天』と『地』の戦を終わらせてみせます。今の私には何も出来ないけれど、きっと出来ることがある。だから、手伝って下さい」

蛍子は真摯に訴えた。

「こんな老いぼれに手伝えることがあれば手伝おう」

ゲンは頷き返した。

「だがまずはその顔をどうにかしろ」

ゲンに言われて気づいたのだが蛍子は真っ赤な目をして目から滝のような涙、鼻はトナカイに負けない程の赤さになっていた。すごいシリアスなムードだったのに蛍子の顔で破壊された。

「うつ、ちよつと湖に行つてきます」

近くにある小さな湖に顔を洗いに行った。
湖に顔を出すと見るも無惨な顔だ。

「酷い顔、これじゃお嫁に行けないわ」

冷たい水に手をつけ顔にかけた。
熱い瞳を冷やしてくれる。

溜め息をついた時、湖が輝いた。

余りの眩しさに目を瞑り、そのせいで湿っていた草に足を取られ湖に頭からダイブしていた。

「ちよ、つて、ええ！ げ、ゲンさん」

ここはそんな深くないはずなのに足が底につかない。

水辺の草を掴んだが千切れ、下に引つ張られた。

「げほ、げ、ゲン・・・！」

そのまま誰にも声を聞かれることなく湖の中に沈んでいった。

異世界（14）（後書き）

なんか戦争について語ってしまった自分が恥ずかしい・
次は・・・シリアスやな。
シリアス編、突入です

我が家

頭がぼうつとする、目を開けると兄の部屋に一人、びしょ濡れになりながら立っていた。

床に水がぼたぼたと音を立てて落ちる。

働かない頭で時計を見た。デジタルなため日にちも気温も測ることができる優れ物だ。

異世界にいつてから蛭子たちは二日ほど経っているようだ。時刻は午前、確か蛭子は二日後に帰ろうと新幹線の前売り券を買ったはずだ。

「あああああ！！」

そう気付くと行動は早かった。

まず太陽の服に着替え、髪も乾かさず自分のバックに荷物を詰め込んで太陽がいつ異世界に帰ってきててもいいように置手紙を残し、しっかりと水道やガスを確認して鍵を閉めて大急ぎで駅へと向かった。

途中、髪が濡れたままの蛭子に人々の視線は集まったが所詮は他人、気にしないで新幹線へと乗る。

やっと落ち着いて冷静になった。

今日、というか数日だがまるで自分のことではない気がした。

異世界なんて自分が行けるものとは思っていなかったし、ましてや『天』の方に落とすとは運命の神も冗談がきつい。

「大丈夫よね」

自分に言い聞かせるように呟く。

異世界から自分だけ先に帰ってきてしまったが太陽も後を追って直ぐに帰ってくるだろう。

何だかあつという間のことで中途半端になってしまった気がする。

一人にしてしまったゲンさんも気になるし、未だ分からない太陽の安否も不明だ。戦いは始まってしまったんだろうか、兄さんは怪我をしてないだろうか。

不安が胸を過ぎる。だが自分にも学校がある、なんとか高校生初の皆勤賞はどうしても欲しいと思ってしまっ自分はなんと淡泊で非道なのか。

そんな自分に飽き飽きしながらも心地よい振動に次第と瞼が重くなっていた。

携帯を開いては閉じ、閉じては開いている自分に溜息が出た。
蛍子は何度めかになる動作を繰り返した。

あれから一日たったが太陽から何の連絡もない。
さすがに蛍子も事態を深刻に考えていた。

「これって行方不明になっちゃうよね・・・」

太陽は普段から明るい性格のため自然と周りから人は集まる。
そんな人が一日でも学校に来なかったら誰かしら心配をするだろう。

そして部屋に太陽がいないことに気付き、もしかしたら警察沙汰にまで発展してしまうかもしれない。

兄は異世界にいます、なんて馬鹿正直に言ったら精神を疑われる。
はつきり言ってそんな白い眼で見られるのは避けたい。

どうやったら兄さんを連れ戻せるのか、冷静に考えても良い案は浮かばない。

蛍子自身、太陽に連れられて異世界に行ったのだ。そんな自分が
一人で行ける訳がない。

だが顔を勢いよく上げた。
あのオルゴール、あれが異世界に行く鍵だと言っていたはずだ。
けれども直ぐに考えを打ち消す。

今はもう学校が始まってしまい、そう易々と太陽の部屋には行けない。

兄さんの命に関わるのにまだ学校のことを考えているなんて、なんて最低だ。

自分の頬を叩いて、学校が終わってから行こうと計画を練る。

流石に学校に行かないと両親に分かってしまうし、何より皆勤賞だ。

とりあえず友達の家にと泊ると言えば、受験に解放された娘として許してくれるだろう。

学校で友達に口裏合わせを頼まないと。

蛭子は立ち上がり、最低限の物を学校のバッグにつめこんだ。

財布にいつもより多いお金を入れて最終チェックが終わり一息ついていると、携帯から音楽がなった。

「あれ、こんな曲入れていたっけ？」

不思議に思いながらも携帯を見るが待ち受け画面は何も示していない。

アラームでもないし、メールでも無い。

おかしいと首を傾げたが、もしかしてと頭に過ぎるものがあつた。

「まさか！」

この曲は太陽の部屋にいた時にあのオルゴールから流れていた曲ではないか。

そう分かった途端、部屋にメモを残す。

『兄さんと一緒にいるので心配しないで』

書き終わったのを狙ったかのように携帯から眩い光があの時と同じように螢子を包んだ。

我が家（後書き）

皆勤賞は捨てられないのです

血の海（前書き）

ちよつと、ぐろいかも・・・しれない？

血の海

以前、飛ばされた時の朦朧とした意識とは違い、今回は直ぐに目が覚めた。

蛭子はまた下半身が湖に浸かった状態だったがここは多分、ゲンさんの家の近くの湖だと思う。

確信が持て無かったのは辺りが暗いせいだ。

「夜・・・？」

そう口に出したが違うことに気付く。空を見上げると太陽が黒い影に覆われているのだ。だからこれは日蝕が続いているのだろう。以前の時よりも太陽が爪の先ほどしか残っていない、それが蛭子に月日の経過を知らせていた。

何日くらい経ったのだろう、蛭子は気持ち悪い濡れた下半身を出してまだ目が暗闇に慣れないまま覚束ない足取りでゲンの家へと急いだ。

だがゲンの家が見えた時にその動きが止まった。

——おかしい。

ゲンの家の扉が半開きになっている。

ゲンは晴れた日以外は絶対に扉を開けっぱなしにはしない。中にある薬草はすごく繊細な物が多いからだ。湿気ないようにゲンは細心の注意を払っている、だからこんな鬱蒼とした天気の日には扉を開けることなんて有り得ない。

「・・・ゲンさん」

薄暗い中を恐る恐る覗いてみる。

何かもわつとした淀んだ空気が広がる。いつもの薬草の匂いと少しの鉄錆臭さ。

思わず口を手で覆った。

何この匂い、すごく鉄臭い。

そのまま、中に入った。暗くて何も見えない。聞こえるのは自分の呼吸と高鳴る心臓の音。

暗闇の中、少し足を出すと何か柔らかいものを踏んだ、視線を落とす。

——どく、どく、どく。

心臓がはち切れんばかりに鳴る。

踏んだのは誰かの足だ。

その先を見たくないと思うのに勝手に目が動いて、それが何かを見ようとする。

「つつ、ゲンさん!!」

倒れていたのはゲンだった。

暗くて顔が見えない。

慌てて抱えて起こすとべっとりとしたものがゲンの服に張り付いている。

「嘘でしょう・・・」

それはゲンの身体から流れているものだった。

床にも染みをつくっている。

床に広がっている血は乾きだしているというのに、蛍子がゲンの身体を揺ると更に血が溢れ出てきてしまう。

腕かいなに抱きかかえるがゲンの身体はどんどん冷えていくばかりだった。

血が流れ出るのをすこしでも押さえようと自分の服を千切ってゲンの腹部へと布をあてがう。けれども止まらない。

ゲンの腹の傷は深く、抉れている。

蛍子はそれを見ないようにして何重にも布を巻く。

巻いた布は血が滲んできて、でも布を巻くことしか出来なくて。

だらりとした四肢は動かない、声をかけているのに返事など無い。

どうすればいいの、お願い、助けて・・・！

誰か助けて！

兄さん！！

地の世界（1）（前書き）

なんか、だんだんブラックになっていく気がする・・・

地の世界（１）

朝の通勤はサラリーマンや学生が多く電車を占領する。

その中は人が密集しているため身動きがとれないほどだ。

だから大人しそうな女子高生のスカートに触れている手は仕方ないと思うが急にその汗ばんだ手はゆっくりとスカート越しに身体をなぞる。

悲鳴を上げたくても恥ずかしさにできない、しかし無骨な手がゆっくりと這うのはもっと嫌だ。

「つつ・・・！」

「あ、ごめんなさい」

不意に手が離れた。

瞳に涙をためながら後ろを振り返ると自分と同じ年頃であろう女子高生がサラリーマンに謝っていた。だが謝るといふ態度ではなく、むしろその声には怒気が含まれている。感情は押さえ殺しているが眉が顰められて汚い物でも見るように蔑んでいる。

その瞳を見て確信する。彼女が助けてくれたんだと。

中年のサラリーマンと睨み合っていたがアナウンスが駅を告げると女生徒は降りていった。

思わず自分も降りる。

「あ、あの、ありがとうございます」

「触られるのが嫌なら自分で強くなりなさい」

そう言って彼女は去って行った。

「すげえーだろ、うちのケイは」

その時の様子を太陽が詳しく説明する。

螢子はローファアの踵で勢いよく痴漢行為をしていた中年のサラリーマンのつま先を踏んで、ぐりぐり押したらしい。

「っ、強いな」

ルシオールは己の足先を押さえながら太陽の妹自慢話を聞いている。

た。

空に浮かぶ太陽が姿を隠し始めて2ヶ月、どの国の王も焦っていた。

夜でも無いのに年中暗く、まるで太陽が隠れてしまったのを嘆くかのように雨も続いている。

人々の不安は一気に高まった。街では暴動が起き、戦士として志願する者が多くなり元々不作だった作物は世話もする人がいなくなり更に少なくなった。

異世界からの勇者として太陽もこうなると『天』との戦いを余儀なくされ、あちこちに駆り出されている。

ルシオールは深い皺を刻みながら暗い城内を明かりを持って歩く。自分は文官だが多少は武術の心得がある、だから仕事を終えたら直ぐに太陽の元に馳せ参じようとしていた。

「ルシオール様！」

突然、兵士から声がかかった。

焦った様子の声に只ならぬ雰囲気を感じとる。もしや敵襲か、と思ったがどうやらそれとは違うらしい。

「どうした」

「それが、有翼人だと思んですが、様子が違うんです」

どう説明していいか分からない様子の兵士にルシオールは後をついていった。

——雨が降っている。

いつの間に外に出たのだろう、だけどそんな考えは直ぐに消えた。

「お前、誰だっ！」

急に現れた黒髪の女に門に立っていた男が反応した。

「お前、有翼人だな」

怒気を帯びて剣を抜く姿を他人事のように見る。

「兄さん、兄さんは？」

呟くような声に門番も動きを止める。

「お願い、ゲンさんを助けて」

胸に抱いている老人を抱きしめながら懇願する。

大粒の雨と一緒に老人の腹部から血が滲み出て流れる。

「お願い、助けて」

今にも泣き出しそうな声で門番の足をつかんだ。

「離せっ！」

「お願い、ゲンさんを助けて。助けて」

振り払おうとする男に必死にしがみついて離さない。

しばらくその応答を繰り返していると足音が門番の後ろから聞こえた。

ぼんやりとした頭で見ると兵士と長身の男がこちらに向かっていった。

ああ、兄さん。兄さんだ。兄さんなら助けてくれる。

その姿を見て、力なく駆け寄って腰にしがみつく。

「兄さん、兄さんっ、お願い、ゲンさんを助けて。助けてよおおお」

優しい兄さんなら絶対ゲンさんを救ってくれる。兄を見た安堵からか、だんだんと目の前が暗くなっていった。

激しい雨と一緒に溢れ出る涙が地面に落ちていった。

ルシオールが門に向かうと雨の中、門番にしがみついている黒髪の人物が目に入った。

有翼人だ、一発で分かる姿だというのに兵士が言った通り、様子がおかしい。激しい雨に打たれながらも胸に抱いた人を離そうとせず懇願し続けている。

近づいてみると、その人物はこちらを見て動きを止めた。

——似ている、太陽に。

確かに顔の造りなど似ていないが口元や鼻など小さな点が似ている。

ルシオールはこの黒髪の人物が太陽の妹だと分かった。

太陽の妹、蛍子はルシオールに気づくと走ってきた。門番に押さえられながらルシオールに抱きついた。

「お願い、ゲンさんを助けて!!」

血走った目、血を吐くような声に驚いた。

太陽は気丈な妹だと言っていなかっただろか。

それなのに泣いて懇願する目の前の女は触れるだけで崩れそうなほど脆かった。

「お願いだよおおお」

泣きながら女は崩れ落ち意識を失った。

その姿を見て何故かルシオールの胸も激しく痛んだ。

地の世界（1）（後書き）

くっそう、明るくしたいけどまだシリアスが続きそうだ・・・

地の世界（2）

ゆっくりと目を開けると真っ白な世界が広がる。

ああ、またか。白い部屋、繋がるチューブ、一定の機械音、全てが煩わしい。

いつものように左手を探るが何もついていない。そのことに気付いて辺りを見渡した。

ここはどこだろう。あ、ゲンさんはどこか。まだぼうつとする頭を回すと蛍子がいるのは白を基調とした広い部屋だと分かる。清潔なベッドから下りる。だが足が床についた途端に崩れ落ちる。足腰に力が入らなかった。それでも蛍子は這ってでもゲンの元に行こうとした。

力が入らず震える手で床を押して、ずるずると扉を開けた。

左右を見ると誰もいない。蛍子はゆっくりと立ち上がる。壁に手をつきながら左足を出す。けれど身体が自分のものじゃないように動いてくれない、力が入らない。

「どうして・・・？」

弱りきった身体と精神のため訳も分からず涙が出てくる。

どうして歩けないなんて分かっている、日にちは分からないが何日も寝ていたせいだ。分かっているけれど何とも言えない虚無感が広がる。

でも頭の中にあるのはゲンのこと。いつも顰め面だけど面倒見が良くて薬草のことに誰より詳しく、まるで第二の父親のような人。見るからに怪しかった自分を匿ってくれてこの世界の一から教えてくれた人。

そんな人を絶対に死なせたくない。

蛍子はその想いだけで膝をつきながらどこにいるかも分からないゲンを探す。

一部屋一部屋の間隔が遠くて、まともに歩けない蛍子にはきつい。寝起きなのにさらに体力を使って身体を引きずった。

隣の部屋の扉を開けようとした時だった。焦ったような声が耳に入る。疲れた身体には優しい声色だ。

「何をしているんです!？」

声にゆっくりと首を動かして振り返ると紺色の髪をした男性がいる。

「だ、れ？」

「何をしているんですか、早く部屋に戻りなさい」

男性は手に持った書類を放って蛍子に駆け寄る。

蛍子はそれを他人事のように見つめていた。考えるのも億劫だ。

「だれ？」

「私はルシオールです。あなたは蛍子殿だろう、太陽からよく聞いている」

太陽、その名前に反応する。

「兄さん、兄さんは？」

あやふやな記憶が蘇る。確か意識を失う前に会った気がする。

「・・・今は出かけています。さあ、早く」

早くベッドに戻るようにルシオールは促すけれども足に根が生えたように動けない。腕の筋肉も久しぶりに動いたため限界だったらしくその場に崩れ落ちた。

「蛍子殿、大丈夫か？」

素早くルシオールが崩れる蛍子の腕をとって床に直撃するのを防ぐ。

そのままぐったりとしてしまった蛍子を抱き上げた。まるで羽のように軽いとはよく言っが蛍子は本当に軽かった。肉がげっそりと落ちて目の下には濃い隈が見られる。

「・・・んは？」

「え？」

蚊のなくような声に聞き直す。

「ゲンさんは？」

「・・・」

蛍子の瞳から大粒の涙がこぼれる。後から後から湧き出る涙は頬を伝って落ち、ルシオールの胸元を濡らす。

地の世界(2)(後書き)

伏線をはり過ぎて自分でも分からなくなってしまうという駄目さ。

r z

分からないところがあったら言って下さい

ちゃんと直します・・・

地の世界（3）

声も無く涙を流す蛍子に胸が痛むが顔には出さずに不安定な精神の蛍子に分かるように端的に言葉を述べる。

「・・・薬を与え、今はまだ眠っています」

安心させるように蛍子の頭を優しく撫でるが蛍子の顔は晴れない。そもそも頭を撫でられているということも分かっていないかのよう、ぼうつとしている。

「どこ？」

「まだ寝てますよ」

「ゲンさんに会いたい」

そう言えば目の前の少女は頑なな意志を持っていて一度決めたことは曲げないと太陽が言っていたのを思い出した。

ならばその姿を見せるまでは大人しくベッドに戻らないと分かり、抱きかかえたまま廊下を歩く。

己の胸に顔をうずめている少女はゲンという老人以外他の物が目に入らないようで視線をあちこちに動かすことはなかった。

ゲンが寝ている部屋の扉をそつと開ける。

こちらの部屋は蛍子とは違ってえらく簡素な造りだ。

ベッドに近づいて胸に顔を埋めている蛍子に声をかけるとにわか
に暴れ出す。

「落ち着いて」

抱え直して、ゲンはまだ顔色が悪いが呼吸は一定音だということ
を確認させる。

わかる程に安心した蛍子はゲンに向かって腕を伸ばす。
ルシオールは身を屈めて蛍子がゲンに触れることができるように
した。

冷たい体温だけど上下する身体にほつとする。

良かった、生きていてくれて。もし、もしゲンさんがそのまま目を覚まさないなんてことがあったら自分はどうしていたんだろう。

あまり考えたくない思いが浮かぶ。体力ともに精神も自分で理解しているよりも疲れているため思考回路がマイナス方面へと向かってしまう。

良かった、生きていてくれて。また一緒に薬草を取ったり、薬の作り方を教えてくれたりして、いっぱい話せる。

安堵の溜息がゲンの髪を揺らす。けれどもゲンは瞼を動かすことなく、起きる様子は無かった。

「連れてきてくれてありがとうございます」

けれどゲンを確信したため、やっと蛭子が口元に微かな微笑みを浮かべる。

「どういたしまして。じゃあ、戻ってくれますか？」

それにこくりと首を縦に振る。ルシオールはその仕草が幼く見えて笑ってしまった。

ベッドに下ろした途端、張りつめていた緊張の糸が切れたのか、それとも疲れからか分からないが蛍子は意識を失った。

地の世界（3）（後書き）

お気に入り登録をしてくれている皆さん、ありがとうございます

最初はお気に入り件数が111だったのを見て興奮したのですが
222や333という数字を見逃して残念でした・・・

だから次は444って数字を見たいので皆さん、これからも応援をお願いします

地の世界（４）

ゲンも無事にいるということが分かった時の目覚めは良いものだった。やはり人間、心配事はなしで眠ったほうが断然いい。

だが起きた時に、いつもは、うざいくらいに周りにへばりついて
いる兄の姿が見えない。仕事かもしれないが太陽はまず倒れた蛭子
が起きて安心と分かるまで寢室を離れないため、仕事も手につか
ないということを知っていたため、何か起こったかと不安になる。

大きなベッドで、ごろごろしていると何か紙に書いている音が聞
こえたため、身を起こすと机に向かって筆をとっている人物と目が
合つと、その人物は手を止めて蛭子に笑いかけた。

「ルシアさん、いえルシオールさん。先程はありがとうございました」

「ルシアで結構ですよ。先程と言っても１日前ですが」

ルシアとは太陽が言いにくいルシオールの名前を簡単にしたもの。
いつも愛称で呼ぶため蛭子もルシアとして認識していたが、蛭子は
目の前の友ではないのだ。

そして苦笑するルシオールに申し訳なさがいっぱいになる。まさかゲンさんを見に行つた後にまた眠るなんて、どれだけ体力がないのだろう。

「重ね重ね申し訳ないです。あの、ルシアさんのことは兄からよく聞いています」

本当は説明が下手な太陽からは、どんな人物かは特定できなかったが、かろつじて聞き取れた特徴から会話をし、相手を探ろうとする。

「なんでも頭がよく、国王の昔ながらの友人だと。兄があなたは頭が切れる方であると伺っております」

「ありがとうございます」

「そう言えば、兄の姿が見えないのですが今はどこに？」

「・・・今は出かけていますが、すぐに戻ってきますよ」

「あら、もうすぐ『天』との戦いがあると以前に言っていたので、もう戦へに行ったのかと思っていました」

まだ本調子ではない身体をルシオールの方へ向けて、細い身体で堂々とする。少し、ふらついたが手を支えにして気分が優れないことを悟られないようにする。

助けてもらったというのに蛭子の態度は尊大だが蛭子は馴れ合い

をするためにいるのではない。

「いえ、まだ準備と視察の段階です」

「それにしては随分と城にいる人が少ないようですね」

「ええ、どんな人でも各地にかりだされていますから」

「その割にあなたはいるんですね」

「私は一介の文官ですので」

相手は中々手ごわい、蛍子が欲しい情報をくれない。流石、最年少で宰相の座についたくらいだ。生きている年数も経験も違う。

ルシオールは笑顔を絶やさないで子供をあやすような口調で蛍子に話しかける、それが蛍子を苛立たせる。まるで自分は関わりの無い話だと言われているような気分なのだ。

自分はこの人の足元にも及ばない、しかしそれで諦める蛍子ではない。

「兄が言っていたんですが、ルシアさんは武術にも秀でていると聞きました。それに今書いている書類も軍備のことでしょう。それを

書き終えたら自分も行くのではないのですか？ それに街の騒ぎも聞こえませんか。兄が言うには城にいても街の音が聞こえる、とか。やはり戦時中ですと男達も兵に志願しますし、残された家族も喪中のように静かになってしまふものですね」

ルシオールを書いてあるものなんてここからは見えるはずがないが勘だったが、それは確信を思っていると思う。兄さんが言っていた情報は確かだし、厚い雲に覆われていて、『地』から見ることでできない太陽は隠れていて薄闇が日中広がっているのだ。こんな中で戦が起こっていないはずがない。

「見事なものです。しかし、私が書いているのはただの予算案だと言ったら？それに今日は前国王の死を悼むために街に市場を出すと、言っているから街は静かだとしたら」

「最後の方は無理でしょう。どんなことがあれ、街は賑やかなものです」

ルシオールは溜息を吐きだしたのち、薄暗い色の厚い雲を見上げた。

「やはり、あなたは太陽が言っていた通りの人物だ」

そういつと雲から視線をはずして蛍子の視線をとらえた。

地の世界（4）（後書き）

死を労わるだっけ？いえ、悼むでしたねv教えて下さってありがとうございます
うございます

って、だんだんと言葉が浮かんでこなくて
私の人生はどうなるのだろう・・・

きつと、この若さでボケるんだあ・・・

地の世界（5）

ルシオールは言うべきか迷っているようだった。自分より若い女性が家族が危ない目に合っていると知っていいべきなのか。

「いいです、言ってください。あなたが思っているより私は弱くありません」

「・・・そうですか、では、あなたの兄、太陽はここより西の街にて『天』との戦いの最中にいます」

やはり、だった。当たり前だ、魔法も何も『天』に対抗できない人たちが見つけた希望なのだ。先頭に立って戦わずして何になるというのだ。

「送られてきた文には、もっと多くの兵と食糧を必要とするのとこのでした」

「・・・私も行きます」

「は？」

ルシオールは言われたことが分からないというように知らぬ振りをする。その仕草が腹立たしくて蛍子は眉を顰める。

「私もあなたに付いて行きます。ルシアさん、あなたは近日中に行くでしょう」

「・・・いえ、まだ支度が整っておりませんから」

優しいな微笑を浮かべる、そんなルシオールを睨みつける。どうせ、この微笑みで蛍子の要求を全てかわすつもりなのだろう。

あなたは子供なのだから、弱い女性なのだから。そうやって何も知らないで守られると優しく残酷に言うのだろう。

「私だって何かできることがあるかもしれないじゃない」

すると今度はルシオールが苛立たしげに長い紺色の髪をかきあげる。優しさを殴り捨てたような仕草に本当の彼が見えた気がする。

「あなたが行って何の役に立つと言つのです。今も身体を支えるので精一杯のあなたが」

「例え役に立たずとも、相手の隙をつくったり、仲間の治療ができるかもしれない」

「かも、が戦場での命取りです。厳しいことを言つようですが、あなたはお荷物にしかない」

ぐ、と螢子は口を紡ぐ。

分かつている、今にも倒れそうな身体。青白い顔、剣など一度も持ったことは無く、戦場など知らない自分。だが、はつきりと言われるとつらい。兄さんは危険がいっぱいの中、命をかけているのに自分はぬくぬくと温かい布団の中にいるなど出来ない。

「こつ言つてはきついですが、女など戦では唯の慰め物でしかない」

血に酔った人々は野蛮になる、それを幾度となく戦を経験したりシオールは知っていた。

「それでも行きたいのですか？」

「慰め者？ 私にそんなことが出来ないということを教えてあげましょう」

本当は怖い、本当は温かな布団に包まって何も知らないまま過ご

せたらどんなに楽か。けれど、けれどもどうしても行かなければならない。

私はこの国のため、国民のために戦おうと思っているのではない。この国のために戦っている兄さんを助けたいのだ。

「私は、私はあなた方を救う光となっている太陽の妹です。体力も魔法も人一倍の兄がいるのに私が何も出来ないとお思いですか？」

「・・・」

そんな身体で何ができると言われているが腕に力を入れて気丈に振る舞う。

「今はご存知の通り、疲れきっていて何も出来ませんが体力の回復次第、あなた方の力になることを保証しましょう」

「ですが戦が嫌いでしょう」

「当たり前です。人が人の命を奪うのに嬉しいなどと思いません。人は戦の道具では無いんです、人は人なんです」

「・・・分かりました、国王に聞いてみましょう」

かなり渋っていたが螢子が尚も言い募ったため、また勇者、太陽の妹ということもあってルシオールはやっと折れたが、やはり女が戦に行くことは反対らしい。

それから何度も説得しようとしたが螢子も頑固だ。決して折れることは無く、国王フレゼリクの是もあって西の街にルシオール達と一緒にいくことになった。

地の世界(6)(前書き)

若干、R15なので

15歳なんて、まだまだ先だぜ という方は御引き換えしを・
教育上に悪いかもしれないのです

地の世界（6）

国王は了承してくれたもの、まだルシオールは渋っていた。事あるごとに蛍子に行くのを止めるよう、穏やかな笑みを浮かべながら諭そうとしてきた。

「蛍子殿、やはり病弱なあなたが行っても太陽の心配事が増えるだけでは」

「やはり身体の体調を整えてからにしてはどうでしょう」

「戦場に女性がいると危ないですよ」

そんなことを言われる度に蛍子は強気に断るのだった。
きつと兄さんの代わりに心配をしてくれているのだろっ、優しさは嬉しい、けれど私は深窓の姫君ではないのだ。世界を初めて見て目を輝かせる子供ではない。

だが、そんな蛍子にも薬の時間がくると子供のようにごねるのだった。

なぜなら、ルシオールの持ってくる薬は何の嫌がらせか、もの凄く臭いし苦いのだ。あまりの異臭に飲むにも喉につつかえて咽てし

まうのだ。

ゲンさんの薬なら、まだ蛭子を慮ってか、少し甘く調合してくれるため蛭子も我慢して飲める。しかし、これは絶対に口にしたくない。飲んだ後も暫く自分の口から、その薬に臭いが感じられるため女として終わっている。

そして今日も地獄の時間がやってくる。

「薬です」

蛭子の前に緑色の粉薬と水の入ったグラスが置かれた。蛭子は分かり易く嫌そうに顔を背ける。

「飲んで下さいね」

「・・・嫌です」

ルシオールを目を見ずにそっぽを向いた。

「私を兄さんの処に連れて行くことを反対しないと約束して下さらない限り飲みません」

はつきり言っただけ薬を飲む時間を遅らせることが目的だったのだが、これでルシオールが行くことを反対しなかったら蛭子もやりやすい。

ルシオールは損などしないが飲まないと苦しむのは蛍子だけだ。全く強情だな、肩をすくめてルシオールは蛍子の枕元へと近づいた。

「分かりました」

その諦めたような声に蛍子は顔を上げて嬉しそうな顔をした。

だから気づくのが遅れた。ルシオールは薬を自身の口に含み蛍子の顎を掴んだ時には全てが遅かった。

「つつ、ふう、ん・や、やあ・あん」

口移しで薬が飲まされた。

いきなりだったため、口に入りきらずに零れた水に溶けた薬が顎を伝う。

それさえも勿体ないというように舌が顎をくすぐり、また唇に戻って流し込まれた。

口内を蹂躪されるわけではなく、ただ薬を飲ませるだけの行為だったのに身体が熱い。初めての感覚に戸惑う、それが更にルシオールの動きを自由にさせる。

抵抗のため舌で舌を押し返して、これ以上、薬が入るのを防ごうとするがルシオールは蛍子の頭をがっちりと固定して顔を背けさせない。

「む、や、やめっ・・・」

拒否の言葉を発した途端に口が開いてしまった。

ルシオールは開いた口を閉じさせないように顎をつかみ、舌をさらに奥へと進める。口内に残った薬を舌で取り、蛭子の舌になすりつけて飲みこませる。

酸欠と自分の意志ではなく飲みこまれた薬のせいで咽てしまった。

「ごほっ・・・ごほっ・・・っつ、何をす、るんです・・・か」

ようやく離された唇を手でふき取り、ルシオールの唇の感触を消そうとするが温かい感触が消えない。

赤い顔で頬を押さえて呼吸を整え、冷静になろうとする。たかがキスでしよう、何をこんなにも動揺しているの。しっかりしなさい。まるで熱に浮かされたようなに潤んだ瞳で余裕綽々な顔をしているルシオールを睨むが相手はいつもの穏やかそうな顔だ。まるで今のキスなど無かったように。

「最低です」

「薬を飲まない方が悪いんです」

「だからって、やっていいことと悪いことがあるでしょう」

「あなたの常識と、ここでの常識は違います」

だからって私のファーストキスを奪うなんて許せなかった。いや、
こんなのキスじゃない、キスとして認めない。

ゲンさんを助けてくれ、優しい人だと思っていたのに騙された。

こんな男、もう二度と信じない。

地の世界(6)(後書き)

・・・Orz

そんな・・・まさか・・・うわーん

お気に入り件数444というぞろ目を見逃した!!
くそう、つ、次こそは、ぞろ目を見たい・・・

地の世界（7）（前書き）

ネガチブになっております。。。
これから、頑張ろう

地の世界（7）

武器も食料も人も大量に集まり、出国の準備は整いつつある。

蛭子も体力は回復しつつあった。しかし問題があった。

「・・・やはり行かれるのを辞めたらいかがです」

「薬を飲んだら口出ししないと云ったではありませんか」

「私は約束した覚えはありませんよ」

「・・・行きます」

一頭の馬を前にして額に手をやるルシオールと腕を組んで口元を真っ直ぐに結んでいる蛭子が対峙している。

飄々として、涼しい顔をしているルシオールとは違って蛭子は子供のように小さな唇を尖らせて、むっつりとした顔だ。

「ですが馬に乗れなければ行けません」

「歩いて行きます」

蛍子の細い身体を見る。

ベッドから起き上がれるには回復したが、やはり元が細い。その足腰で何日も歩けるものか、途中でへばってしまって野生の動物に襲われるのがオチだろう。

「その身体では無理でしょう」

「行きます」

このままでは折れそうにない蛍子に対してルシオールはある提案を持ちかける。

「ならば私と一緒に乗りましょう」

溜め息混じりの声に顔を上げる。

まあ、そう言われるのを待っていたが自分から言うのは躊躇われた。ただでさへお荷物状態なのだ、これ以上迷惑はかけられない。

「ありがとうございます」

自分は何も出来ない我が儘な子供なのだ。荷物と一緒に馬車に乗りますと図々しく言っても蛍子が乗ることにより確実に荷を曳く馬の負担になる。だが今までテレビの世界でしか見たことのなかった馬に数日で乗りこなす、という技術は残念ながら蛍子にはない。

まず馬に乗る方法も知らないし、そもそも怖くて触ることができない。そんな状態では確実に無理だ。

「足手まといだ、なあ」

なんで学校で習っていることが通用しないんだろうか。

化学も数学も歴史も覚えたというのに、ここではいらぬ。将来、役に立つと必死に勉強したのにここでは通じぬ。これがルシオールが言っていた「あなたの常識はここでは通用しない」だ。今更ながら理解する。

乗馬も剣術も自分が一生縁が無いと思っていたのが今、ここで必要なんて。誰も教えてくれなかった、いや、考えもしなかった。必要とすら思ったことなどなかった。

「・・・そんなことはありませんよ」

淡く微笑んでくれて元気つけようとしてくれるルシオールには申し訳ないが、やはり自分は足手まといだと思う。

けれども兄さんが無事なのを目で確かめないと気が済まないのだ。

「ありがとうございます」

その優しさが嬉しいが残酷だ。何もできない自分が浮き彫りとなる。

「私は何を学べたんだろうか」

この18年間、学んだことは本当に身についたんだろうか。
何も出来ない自分がいると思考まで暗くなってしまう。

——バチン

自分の頬を強く叩いて気合を入れる。

「痛っ」

少し強すぎたようだ、しかし気合いは入った。

待っていて、兄さん。

挿話(3)

ルシオールはいくら片づけても消えない、むしろ積み重なっていく書類を抱え、もう片手に蠟燭を持ちながら暗い廊下を確かな足取りで歩く。確かに疲れているがそれに顔に出さないのは、やはり若き宰相である。

自分の部屋に戻ると寝室の扉へと顔を向ける。

国王からの命令で、人の目の届く所に置いておけと言われたのだ。そこで自ら名を挙げ、監視という名の名目で手元に置いている。

もう寝ているだろうと思って、静かに扉を開ける。そして膨らんでいる布団を見るが、それが上下していないことに直ぐに気付き、躊躇いもなく布団を押し上げる。

そこには、枕が置いてあるだけだった。

「・・・つつ、やられた」

見くびっていた。あれだけ弱っていれば、そのまま泥のように眠り続けて暫くは目を覚まさないと思っていたが、どうやら見当が外れたらしい。

だが、思い立つことはあの裏切りの老人のこと。

『地』の人間でありながらも彼は『地』を裏切り、『天』へと忠誠を捧げた。彼を治療した時に見た、あの背中。忌わしい薫が彼の背中を覆っていた。

本当は裏切り者として処分しなくてはいけない。しかし、彼は自分達が知り得ない『天』の情報を持っているかもしれないと生かしておいてある。また太陽の妹、蚩子殿が哀願したからだ。きっと蚩子は『天』に落とされ、あの老人に助けられたのだろう。

そしてその恩を返そうとしているのだろう。

ルシオールは確かな確信を持って足を未だ眠り続けて目を覚まさない老人がいる部屋へと足を速めた。

その部屋を開けると、ぼんやりと人影が小さなベッド脇に見ることができた。

そつと扉の影から覗いてみると蚩子は今にも泣き出しそうな目で老人を見るだけだった。

自分も疲れているはずだろうに彼女はそこから身動き一つしない。微かな呼吸をする老人をただ見つめているだけだ。

「ねえ・・ゲンさん、起きてよ。ねえ、ゲンさん、もう訳が分からないよ」

ふと微かな呟き声が聞こえたのだが、その言葉は思いつめていて今にも崩れそうだ。

泣きそうな声で、しかし無くのは許せないといった顔で唇を噛んでいる。自分の思いを涙として流せば少しは気が楽になると思うのだがそれさえ彼女はしない。

性根が頑固なのだろう。だがいつまでも溜めこんでおくといつか砕けるような気がしてならない。

確か、まだ１８だと太陽が言っていたな。だがその割に大人びていると言っていたが、目の前にいるのは、まだほんの１８の女の子なのだ。

こんな世界など知らない、そう、まるで何も知らない姫のように。

見続けているとがくりと大きく体が傾いた。

はっとして扉を開けて、蛍子の身体を掴んで、下に落ちるのを防いだ。そのまま深い眠りについたようでルシオールが蛍子の身体を抱き上げるが、ぐったりと胸に身体を預けていてピクリとも動かない。

口が少し開いて、睫がふるりと震えた。

その無防備な様子にふわりと笑ってルシオールは蛍子の額に唇を当て、廊下に出た。

挿話(3)(後書き)

なんか凄くお待たせしました
これからも頑張って行くので宜しく願いしまっ

地の世界（8）

薄暗い道を何の言葉もなしに行く。

すこし速い歩みは蛍子の眠りを誘うことは無いが確実に体力を削っていく。

蛍子は今、フードをすっぽりと被ってルシオールの前に座って馬に揺られている。どうやら黒い髪と瞳を隠すためらしい。この『地』の世界には黒髪などいない。それに勇者、太陽の妹という人々の好奇の目から隠すためと言われた。

やはり、その姿のまま集まった何千もの兵士達の前に出たのは好奇を買ったがルシオールが何も言わないため皆を口を閉ざした。

「大丈夫ですか？」

「はい」

何度もこの問答をしただろうか。

背中にルシオールの温もりを感じながら毅然と答える。

「休みたくなったらいつでも言ってお下さい」

彼は本当に優しい。

足手まといな自分なのに、邪魔にしかないのに。

彼は私に優しい。

今も蛍子に負担がかからないよう振動を抑えているため急ぎたい旅であるはずなのに速度を落とす。しまいには馬が跳ね上がるのに合わせ、落ちそうになる蛍子の腹に手を回し、落ちないように自分の方へ引き寄せている。

もともと太陽が戦っている場所までは5日かかると言われていたが、これでは7日位かかりそうだ。

「・・・あの」

口を開いたものの、どうやっていいか分からない。

自分のために速度を遅めてくれているのに言うべきではないかもしれない。

「大丈夫ですよ。もともとこの暗さです。余裕をもつての行動ですから」

そう言って蛍子の言いたいことを分かっているルシオールは空を見上げる。

しかし太陽の明るさは一切見えず雲は暗い影をつくっているだけだ。

「・・・そうですね」

けれど思うのだ。

自分ももっと強かったら、もっと賢かったら。
きつと何かが違ったのだろう。

しかし嘆いていても仕方ない。蛍子は蛍子だ。何者でもない。自分ができることをするしかない。

「有翼人の方は強いと兄に聞きました」

「ええ、彼らは魔法が使えます。それに比べて私達は体力だけ。しかし負けませんよ、太陽がいます」

突然出てきた兄の名に反応する。

「太陽は私達を奮い立たせてくれます。それが私達をどんなに勇気づけていてくれるか」

「不肖な兄ですが少しでも皆さんの力になっているならば私も嬉しいです」

微笑を浮かべていると、ぽんと頭に暖かいものが乗る。

それは優しく左右に動いて離れていった。兄、太陽にもあまりやられたことがない、というかやらせない、その行動に心が少しだけ温かくなる。

離れる瞬間、名残惜しくなってしまった自分を叱咤するように顔を顰める。

「・・・子供じゃないですよ」

「はい、分かっています」

声が笑みを含んでいるのは分かったが自分の膨れている顔を見られるのは嫌だった。自分の子供っぽい姿をルシオールには見られない。

なぜだろう、そんなことを思うのだが答えは見つからない。

「・・・降りて木の影に隠れていて下さい」

突然、ルシオールの声が鋭くなった。

訳も分からず身を強ばらせていると押されるようにして地面に下ろされた。

瞬間、馬が嘶いて前足を大きく上げ、馬が傾く。

だがルシオールは落ちることなく手綱を握って馬を宥めかした。

「な、なにが」

いつになく真剣な顔を見て、とりあえず馬から離れる。

「早く隠れなさい」

ルシオールは端正な顔を歪めて舌打ちとともに空を見上げる。

「まさか、ここで会うとは。いつたいなぜ・・・」

蛍子もその声に曇天空を見上げると小さな黒い影が見えた。更に目を細くして見てみると人だ。背中に黒い翼が生えている人だ。その影は確実に蛍子達の方に向かっていた。

地の世界（9）

突然始まった戦い。男達の叫び声と剣の重なる音がすぐ目の前から聞こえる。野太い、まるで獣のような声、金属がぶつかりはじける鈍い音。

目がそらせない、いや何故かそらしてはいけない気がした。

少し離れた木に身を預けて草藪から窺う。

ルシオールだ、鼻に皺を寄せて相手を睨みながら剣戟を繰り広げる姿は全身から鬼気迫る気配を出す。

「ひつつ・・・」

真っ赤な血が覗いている藪に飛んできた。

そしてすぐに血特有の匂いが広がったため、せり上がる悲鳴を押し殺した。

錆ついた鉄の匂いだ、気分が悪くなる。

その血を見ないようにルシオールを視界に入れる。血なまぐさい中で彼は戦いの中にいるように感じさせないように立っていた。

漆黒に似たような紺色の髪をたなびかせながら、彼はまるで踊っているように綺麗だった。相手の剣をかわしながら自身の剣を突き付ける。

しかし相手がそれをかわすと今度は間髪いれずに蹴りをいれようとする。

そこから見る剣舞ではない。剣だけでなく全身もを武器にしているのだ。

まさに命の取り合いだ。

だが、毎日降る雨のせいか地面はぬかるんでいて有翼人の人が足を滑らせた。

その生まれた一瞬のすきを狙って、ルシオールは有翼人の黒い翼を掴んで喉元に血濡れた剣をつきつける。

「だ、駄目」

「螢子殿!!」

思わず飛び出してしまった。

ルシオールが人を殺すのを見たくないのだ。

分かっている、自分が甘ちゃんなのは。人の命の重みを知らないで、こんな場所に来てしまって。戦い方も知らないのに人が人を殺すことを止めようとして。

何が正しいかも分からないくせに。

けれど人が人を殺すのはいけないことだ。

そんな根底があるのにルシオールの言葉が広がる。

「ここではあなたの常識とは違う」

人が人を殺すのはいけないこと、それは常識だ。けれど、この世界では違ふのだろうか。人が人を殺すことのは常識ではないのか。

感情にまかせて飛び出してしまったものはいいものの、自分の中でせめぎ合いをしていたために蛍子は気付くのが遅れた。蛍子の被っていたフードが木の枝にかかって蛍子の顔を出して漆黑、そうまるで目の前にいる有翼人の髪より濃い髪をさらけ出した。

「・・・黒」

突然飛び出してきたか細い女に2人の視線が集まった。
ルシオールと取っ組み合いをしていた有翼人の黒騎士の人が呟いた。

「・・・見つけた」

にやりと口の端が上がったと思うと焦って隙が生まれたルシオールを蹴飛ばして蛍子に向かってくる。

「ルシアさん！」

倒れて呻くルシオールに近寄ろうとするが日に焼けた手に腕を掴まれる。

蛍子の腕の2倍はありそうな腕だ。ぎりぎりど蛍子の骨と皮しかない腕が悲鳴を上げる。

「い、痛っ」

「わりい、しっかし細えな」

声を聞くと精悍な男だ。しかも自分とかなり歳が近そうだ。

蛍子は必至で相手の手を外そうとするがびくもしない。蛍子の腕を掴む手を緩めてくれたものの、蛍子を逃がさないように腰をも掴む。

「・・・細い」

確かにその屈強な身体と比べたら蛍子の身体は細いだろう。

しかし女の身としては普通だと思う。自分より細い人はこの世に何百人といえるのだから。

「は、離して」

身を擦って逃げようとするが、相手はその抵抗を片手で封じ込めて黒い2つの翼を羽ばたかせた。

そして空へと一気に舞い上がった。

「つつ・・・!」

初めての空中、しかも方手だけで支えられているという状況で頭が混乱に陥る。身を強張らせて落ちないように必死に黒騎士の人に掴まる。

足が安定せず下を向くと、まだ有翼人と戦っている姿が見える。

「じゃあ、行きますか」

口笛を吹くと下で戦っていた黒騎士の人が上を向き、一斉に飛び立った。

そして蛍子を抱いている人に近づき、蛍子をじっと見つめる。

「これが・・・？」

「ああ、そうだと思うぜ」

何の話か分からないが自分のことだと分かる。なにせ蛍子を見ながら「これ」扱いをするのだから。

「ど・・・どの・・・蛍子殿！！」

下からルシオールの声が聞こえた。肩を押さえながら必死に有翼人に捕まった蛍子に呼びかけている。

「ケイコって言うのか？」

「・・・」

横から聞かれるが蛍子は黙って下を見つめる。かなり離れているがルシオールと視線が合っていることを確認する。

「ジニアス副隊長、俺が持ちます」

「・・・頼んだ」

何も答えない蛍子を部下に渡す。

自分より何倍も細い蛍子をこのまま抱いていると力加減が分からずに折ってしまいそうで怖かったのだ。

「・・・あの、あなたの名前は？」

蛍子の身を受け取った有翼人の人に蛍子はすまなそうに眉尻を下げて名前を聞く。蛍子に話しかけられた有翼人は驚いていたが我に帰り姿勢を正しながら答える。

「自分ですか？　自分はサーリーと言います」

「えと、サーリーさん、ごめんなさい」

「は・・・づあっ！..」

蛍子はサーリーの股に思い切り蹴りを入れた。

蹴りを入れられたサーリーは蛍子を抱えている手を緩めてしまった。その瞬間を逃さず蛍子は力一杯サーリーを押して空中へと身を投げ出した。

「なっ・・・！？」

ジニアスが蛍子の予想外の行動に反応できずに蛍子は重力により落下する。ジニアスが手を伸ばしたがそれをもすり抜け、蛍子は落ちて行った。

空中に身を預けている蛍子はただ自分の身体が運よく木にぶつか
ることを願って身体を丸める。

——ドボンッ！！！！

蛍子の身体は幅広い川に落ちた。辺りに飛沫が飛び散る。
身体は一瞬にして冷たくなり、落ちていた時点で意識を失っていた
た。蛍子はただただ川の流れに身を任せるしかなかった。

地の世界（9）（後書き）

男じゃないから分らないけど
それはきっと壮絶なんだね

どこかで水の音がする。浅い夢にたゆといながら考えた。

それにしても寒い。身体の下から全身にかけて冷えを感じて布団を引き上げよとした、だがいくら引いても温かさは得られない。それに身体を覆う布団は極めて軽く乾いた落ち葉の匂いがした。

「寒い・・・」

どこまでも続く寒さに声を出し身を起こした。

するとたちまち布団が方からずり落ちる。いや、布団ではない、服だ。蛭子のものでない大きな服を顔に近づけていると精悍な香りがする。果物のような、柑橘系のさっぱりとした香りだ。

服がずり落ちると上半身を強い寒気が包んだ。服の下に隠されていた身体は一糸纏わぬ裸身だったのだ

「なっ・・・!？」

胸を覆い慌てて周囲を見回した。薄暗い空間はかなりの広さをもつ空洞で中央には消えかけた焚き火がくすぶっている。炎が夏希の透け通るような白い肌が赤い炎の光りを浴びて更に白さを際立たせる。腕が、足が、胸元が全て炎により照らされている。

焚き火の周りには服が干してあった。

蛍子は洞窟の入り口に目を配りつつ手早く乾いた衣服を身につけた。

服を着ながら昨日のことを思い出す。有翼人に抵抗して川面に落ちた。だがその後の記憶はない。

何故こんな場所にいるのだろう。いや、それよりもここはどこか。次々と浮かぶ疑問の答えを求めて洞窟の入り口に目を向けたぎゅっとして動きを止めた。

「おや、起きましたか」

洞窟に響く声に身をちぢこませ、服を掴みながら声の主を凝視する。

「・・・ルシア、さん」

今にも泣きそうな声にルシオールが顔をあげ、あまりの顔に目を見張った。

感情を削ぎ落とした顔で少し睨んでいるように見ている。まるでルシオールの一挙一動を見守るように。

「見たんですか？」

自分を守るように、身を小さくする。

それだけの行為でルシオールは蛍子が何を言いたいのか分かった。

「いえ、濡れた服を脱がして温めただけです。見てませんよ」

肌に触れるということは年頃の女性には敏感なのだろう。しかし蛍子を見ると、それ以上に何かある気がしてならない。

「大丈夫です。ほら、食べ物を持ってきましたよ」

優しく子供に話しかけるように諭すと蛍子は力を抜いて、ルシオールの手の中にある物に釘付けになる。

「火に近づいて暖まった方がいいですよ」

その言葉にやっと身体を動かす。

蛍子はその言葉にまた二の腕を擦りながら、ずっと寝ていたために強張ってしまった身体を引きづりながら火に近づこうとすると、それを見たルシオールが蛍子の身体を抱えて、一緒に座った。

ルシオールの心臓の音が聞こえる。

それは、ゆっくりと鼓動を刻んでいて体力を削られていた蛍子には居心地の良いものだった。

眠りを誘ってくるものだったが蛍子は顔を上げてルシオールと目を合わせた。

「どうなっ たんですか？」

有翼人を振り払って下に落ちたところまでは覚えている。しかしそこから意識はなかった。

「全く、あなたは予想外のことを」

ルシオールは非難するように蛍子を見るが蛍子の髪を梳く手つきは優しいものだった。

地の世界（10）（後書き）

不安は解消されました
さあ、のんびりするぞ

地の世界（11）

髪を梳かされる感触が気持ちよく蛍子はまるで猫のようにうつとりと目を細め、喉を鳴らす代わりに吐息を漏らす。

前からは焚き火による暑さ、後ろからは丁度良い温かさについて瞼が閉じそうになる。

「う、ん」

「さあ、まだ疲れているでしょう。何も考えずに眠りなさい」

その言葉に導かれるように瞼を閉じかけたが、はっと身を起こして蒼色の瞳と向き合う。

「眠たいけれども今、聞きたいことがあります」

「また明日、聞かせてあげますよ」

蛍子よりも大きな堅い手で卵型のほっそりとした蛍子の顔を包む。

――嘘だ。

蛍子は柔らかな瞳を見て愕然とする。
ルシオールが告げることは嘘ばかり。全て蛍子を守る嘘。知って

しまえば後戻りができないから、知ってしまったえば否応なしに蛍子も戦いに参加しなければならないから。

けれど真実を知らなくては兄、太陽に近づくことができない。『天』と『地』の境界線を無くすことなどできないのだ。

「そうやって優しく嘯いて。あなたはそんなに私を陵轢したいんですか」

きつと視線を合わせて目を逸らさない。蒼と黒が交差する。一步も引かないと黒い瞳が訴える。

はあつと溜め息が聞こえ蛍子が啞然とする前にルシオールは自分を殴り捨てた。

「これだから、お子様は困る」

「なっ」

「なぜ分からない。戦は子供の来る場所ではない」

「子供じゃ」

「予想もしない行動に出て、挙げ句の果てには俺に抱かれるだけ。力を入れずとも折れるこの手」

荒々しく蛍子の手首を掴み、軽く捻る。余りにも唐突だったために何の準備もしていなかった骨が軽く悲鳴を上げる。

「この足」

手首から圧迫が無くなったと思ったら反物の上から腿を撫でられる。そうつとなぞられる感触に背筋がぞくりとした。

普段の彼に似つかわしくない行動に息が止まる。

「この首」

ルシオールの手が蛍子の首に回ると蛍子は瞳に明らかな怯えを見せた。

それを嗤うかのようなルシオールは言葉を重ねる。

「これだけで恐ろしいでしょう。逃げたいでしょう。甘やかされて育った子なのだから、このまま甘やかされることしか知らない、できないのではないでしょう」

ああ、私は甘やかされてきたのだろうか。そうだろう、お金にも困ったこともなく毎日食事をとることができる。失う友達などいなく、毎日笑って。戦いなど知らず、知りもしらなくせに上辺だけの良心から戦はいけない、と。親がいて、兄がいて友達がいる。それが当たり前だと思って。誰かから憎悪という感情を抱かれたり自分が抱いたこともない。

ああ、私は甘やかされてきたのだ。それをただ享受するだけで何も変わらないと信じて変わろうとせず。

なんて愚者なのか。人に言われて初めて気がつくなんて。こんな優しい人にまでそう言わせて。

「俺は酷いでしょう。ならば戻りなさい、自分があるべき場所へ」

でもね、私は知らないの。

「・・・もの」

蚊の鳴くような声が俯いている蛍子から聞こえてきた。
ルシオールは身を屈めてそれを聞きとろうとする。

「だっ・・・!」

だが顎に鈍痛が走る。予想もしなかった反撃に刹那、息が止まる。

「だって知らないもの!」

ルシオールの腕から突如立ち上がった蛍子は僅かにふらつきながらも叫んだ。

「私だって帰りたいわよ。こんな戦しかない世界から逃げたいわよ。でも分からないのよ、どうやって帰るかなんて。それに私の兄はここで戦っているのよ、有翼人から逃げるしかない貧弱なあなた達から」

「なっ」

今度はルシオールが絶句する番だったが蚩子は口を挟ませない。

「私はこの世界なんか興味なんてないもの。勝手に戦っていればいいじゃない。ただね、兄さんだけ返してくれればいいの。お人好しで人助けが好きだからあなた達に手を貸しているに過ぎないのよ。私が頼んでこつちの世界なんかもう二度と行かせない!!」

こういう所が子供だと言われるのだ。他人を気にせず駄々をこね、人を困らせる。喚くことしかない子供特有のものだ。

「何もかも知った顔して、自分が一番だと言いたいわけ？ この唐変木！」

蚩子は鼻息を荒くして叫ぶ。

文句ある？ と腕を組んで返答を待った。

ルシオールは茫然とした後に一気に吹き出した。

地の世界(11)(後書き)

爆発!!

地の世界（12）

腹を抱えて笑い出したルシオールに更に苛立つ。いつも意に介さないとはかりに対応されるのだから。

「笑いたければ笑えばいいでしょ」

ふん、と洞窟から見える暗い外を見る。

頭に血が上ってうるからと言っても蚩子はそこまで考えなしではない。

今、怒りに任せて馴れていない夜の森に出るなんてできない。出たが最後、野犬に襲われる可能性があるし道に迷ったら一貫の終わりだ。

だから蚩子はやはりルシオールの力を借りなければこの世界で生きていけないのだ。

だが近くに座ることは憚られ、少しでも遠くへと距離をとる。

「太陽が言った人とは違いすぎる」

まだ出る笑いを抑えながら目を吊り上げたままの蚩子を見る。

「我が儘を言わず、周りに左右されることなく自分の道を自分で決め、弱さを見せない」

太陽がいつもルシオールに言う言葉だ。

「だが一番に会ってみると泣かれ、駄々をこね、子供のように叫ぶ」

「何が言いたいの」

蛍子は険しい表情のままルシオールを見る。

「怒りはその者の本質を見せる。覚えておきなさい、蛍子殿」

先程とは違い先生のように囁くルシオール。

本当の彼はどれなのだろう、いや、どちらも彼なのだろう。

「さあ、明日に全て知りたいことを話してあげるから今日は寝ましよう。そちらは寒いでしょう、こちらに来なさい」

唇を噛み締めた蛍子はその場に座る。お尻がとても冷たく少し湿った感触がある。

ルシオールは苦笑するがそこから動かなかった。

「明日、話しあいましょう。あなたの先のことを」

ルシオールが瞳を閉じて身動きをしなくなった。

蛍子はそれを確かめてから、消えていない焚き火に木を足して身体を近づける。

少ししか火の側を離れていないのにこの寒さは何だろうか。手を擦り合わせて腕をさする。下半身もまだ冷えていたがそれを無視して火の脇に横になる。けれど今言い争いをしたルシオールと向き合うのが嫌で焚き火に背を向け、少しでも温まろうと丸くなる。

寒くて眠れる訳がないと思っていたが身体は休息を訴えていたよ

うで段々と意識が薄れていく。蛍子が微睡みかけた時、衣擦れの音がして丁寧を抱えて上げられた気がしたが蛍子は感じる暖かさに身体をすり寄せた。

すぐ近くで心臓の音がする。それは煩わしくない速さで心地よい。何より背中やお腹に回されたものが気持ちよい暖かさ。

上から苦笑が聞こえた気がしたが蛍子は起きたくなく、そのまま意識を失った。朝、起きた蛍子が見たものは消えた焚き火とルシオールに抱かれた自分の姿だった。

地の世界（13）

朝が明け、寒白い空が冷たい風を運んできた。蛍子が身を竦ませて目を開けると端正な顔が目の前に飛び込んできた。

「つつ・・・!!」

何とか悲鳴を押さえこんで今の状況を確認する。どうして自分はルシオールに抱えられて彼の上着で包み込まれているのか。昨夜、蛍子が足した小枝は更に足されていて炭と化していた。

きつと彼が蛍子を温めようとしたのだろう。それは分かる、けれども蛍子はこういった過度なスキンシップは慣れていないのだ。あとなけなしの乙女心もざわつく。

中性的な顔は男性とも女性とも言われても納得できる。だが、顔が整い過ぎていて羨ましいの概念を越してしまう。このさらりとした濃紺の髪に合った瞳がこの瞼の下に隠されているのだろう。睫毛も紺色でとても長い。

つい、いいなと手を伸ばして触れようとする。

しかし、触れる前にルシオールの睫毛はふるりと揺れ、濃い紺色の瞳が姿を現す。その瞳は愉悦の色が滲み出ている。

「寝込みを襲うなんてそこまで私に興味があつたんですか？ 別にあなたなら構いませんよ」

「なっ・・・!？」

完璧に遊ばれていると思いながらも一瞬で赤くなる顔を押さえることはできない。

「おや、刺激が強すぎましたか」

「つつ・・！！ ふざけないで下さい」

昨夜に彼が見せた別の顔を蛍子が知ってからというものの容赦がないみたいだ。優しいだけの彼だと思っていた蛍子はどう振る舞うべきか考えあぐねるが彼と蛍子はそこまで親しい仲ではないし、これからそのつもりはない。そう結論付けると蛍子はルシオールから抜け出して洞窟の入り口付近に座る。

「昨夜、次の日にこれからのことを考えるって言いましたよね。それについて今、話しましょう」

ルシオールはわざとらしく肩を竦めたが真面目な顔になり、蛍子に言う。

「あなたが河に落ちた後に私もあなたを追って川に流されました。幸い、川の流れは速くなかったのですが川幅があったために私達の部隊からかなり流されました」

「では、どうやって落ちあうのですか？」

蛍子は自分がしてしまった失態に顔を青くする。蛍子が有翼人に捕まったりしなければルシオールは部隊から離れることなく、ましてや兄、太陽の救出に早く行けたに違いないのだ。

「部隊には、私の他に指揮をする人がいます。気にすることはあり

ません」

「・・・」

「ただ、私も咄嗟であなたを助けたので、何も持たずに来てしまったのです」

持っているのは剣と一人分の水入れ、それだけだと言われた。

「私、足手まといですよね」

「ええ」

自分で言った言葉なのに肯定されると更に気分が沈む。分かっていたけれど。ここまで彼のお荷物になるとは自分でも思いもよらなかった。

「だから言っただでしょう、あなたには危険すぎると。あなたでは無理だと」

「・・・」

深い深い溜息をルシオールはつく。的を射た発言だとは分かっているがあまりの悔しさに下を向いて唇を噛んで怒りを抑えようとする。

「いいですか。これからあなたのことを決めましょう。この森から抜けたら、きっと太陽が戦っている国の前の村に着くでしょう。そうしたら、あなたはそこの宿屋で私達を待っていてください」

「で、でも」

「あなたは足手まといなんですよ」

その言葉を何度も繰り返されて押し黙る。けれども聞き分けのない子供のように蛭子は考える。

「でもお金も持っていないんだし、それに宿屋の方が危険なんじゃ」

「心配いりません。私が王家に通ずるものだとして証明して、あなたを保護するように伝えますから」

その後にも何度も口答えをするにもルシオールに言いくるめられ蛭子は渋々頷き、そうして2人は洞窟を出た。

地の世界（14）

行けども行けども、あるのは蛍子とルシオール視界を埋め尽くす緑。

ルシオールが2人の歩く道を確保するように剣で草を薙払って進む。

だが草は蛍子の背丈以上にあつてなかなか先が見えない。

またルシオールは蛍子のために安全性を確保して何度も振り返ったり声をかけ、しまいには抜かるんだ土に足を滑らした蛍子に手をかす。

「あ、りがとうございます」

「いえ、雨で土がぬかるんでいるので気をつけて下さいね」

蛍子は首を縦に振って置いていかれないようにルシオールの背中を目指す。

蛍子より労力を使っているためルシオールは疲れを見せてもいいはずなのに全然疲れた素振りが無い。ただ歩いているだけの蛍子の方が息を乱している。だがそれを諭されないためにも蛍子は歯を食いしばって息が漏れないようにする。

きつと蛍子が疲れていると分かった途端に彼は歩みを止めるだろう。本当は自分こそが早く太陽を助け、有翼人との戦いに行きたいはずなのに。英雄、太陽の妹だからここまで待遇されるのだ。いや、待遇をしなかった人もいたが。

「少し休憩しましょうか」

「いえ、まだ」

「最初から頑張っても後が大変になりますよ。ね、私も少し休憩したいと思っていたんです」

気付かれた、上手く隠せていると思っていたが彼にはお見通しのようであつたみたいだ。

蛍子の何倍も大変な思いをしているルシオールにそう言われたら引き下がるしかない。ルシオールは納得した蛍子にその場にいるように言い、自分は草むらの中に入って行つた。蛍子が暫く待っているとルシオールが草蔭から顔を出し、そのままルシオールの後に着いていくと水の流れる音がする。気持ちがせかつて進むと綺麗な透明の水が流れている。

「水だ」

「そうですね。これなら飲めますね」

ルシオールが最初に口を付けてから蛍子にも飲んでいいと合図を出す。

蛍子は水を掬っては飲み続けたが飲みすぎないようにとルシオールの言葉でしぶしぶ引き下がる。

「この水は冷たいですからね。あまり飲みすぎると身体を壊すので程々にして下さいね」

仕方がないためルシオールの持っている水入れいっぱい水を入

れて水の確保をしながら身体を休める。

（身体を洗いたいな。少しくらいならいいかな）蛍子は汗でべとつく身体を一瞥して流れる水を見る。とても冷たかったが我慢すれば入れないことはない。

「身体を洗うのは待って下さいね。これ以上体力を削るわけにいきませんからね」

ルシオールという言葉に思わず呻く。何故、考えていることが分かるのか。腹ただしく感じる。

だが彼の言っていることは正論なのだ。人間はお風呂に入ることにもエネルギーを使うため疲れきっている蛍子が入ってしまったら更に体力がけずられてしまうのだ。

「まるで姑だ」

いちいち蛍子がやることなすことに口を出すなんて嫁をいびる姑以外いない。自然と溜息と呟きが漏れる。

ルシオールの正論はもちろん分かっているけれど自分のやりたいことを端から否定されるとどうしても反抗心が沸いてしまう。

「何ですか？ 私が姑と言っているんですか」

はつと口を押さえるにも後の祭り。しかと小さな呟きはルシオールの耳に届いていたようだ。

怖くて彼を見ることができない。川のせいだろうか、微かな寒気を感じながらゆっくりと後ろを振り返った。

地の世界（14）（後書き）

秋が始まった感じが半端ないですね

寒くて虹乃はっもうボアシャツです^^

実は虹乃、超冷え性のために今も足首、足先がやばいです
女性の皆さん、冷えは大敵ですな

想像をしていた通り、いや通りこしていたかもしれない冷笑がそこに張り付いていた。口元は優美な弧をえがいているのに目元が冷ややかであった。

「は、ははは」

日本人の特技、笑ってごまかせを実践する。だが変わらぬ顔を見て自分の空笑いが虚しく響き渡るのを他人事のように聞いていた。

「私が、何ですって？」

「まるで、そうまるで衆に先駆けて、皆の光となるお人だ、と」

苦しい、苦しいよ蛍子。自分でとても無理な言い訳だと思いながらも、そう言うしかない。だって言ってしまったものは言ってしまったものなもの。

目も合わせることができずにやはり下を向いてしまう。冷ややかな沈黙が辺りに広がって息苦しく感じたた下の青々とした草の上にいる小さな虫と目を合わせているとこちらに向かってくるルシオール足音が聞こえ、思わず目を瞑った。

しかし予想とは違い、降りてきたのは温かな手。それが蛍子の頭の上を撫でる。

「え、あ、え？」

「全く、あなたは」

柔らかな口調に上を向くと、まるで春風のように優しく温かな微笑みがあつた。ふわりと笑う姿は全てを安心させるような安堵感を与える。蛍子は瞬きするのも勿体ないように感じて目が離せなかった。

「さ、休むところを探しましょう」

不意に背中を向けたルシオールは袖を引っ張ってしまった。どうかしましたか？ そんな表情をしていたのを感じとりとつさに口を開く。

「2人目の兄さんが出来たみたい」

兄という発言にルシオールは驚いていたようだが蛍子は自分の言葉にしつくりきていた。

兄、そうだ。まるで兄みたいなんだ。蛍子を甘やかすのは太陽だけだと思っていたがルシオールも大概蛍子に甘い。そして蛍子を守ってくれる。それが煩わしい時もあるけど自分を大切に思ってくれるのが嬉しい。自分が愛されていると感じられて嬉しい。

「兄、ですか？」

「はい！」

元気よく返すと若干悄然としてない紺色の瞳とぶつかったので蛍子は怯んでしまった。調子に乗り過ぎてしまっただろうか？

「兄なんて言われて嫌ですか？」

「いえ、光栄に思いますよ」

ルシオールにそう言ってもらい蛭子は笑顔が自然と浮かんでまた歩き出した。だけど足が痛むのに顔を顰めずにはいられなかった。幸い、ルシオールは後ろを向いて歩きだしたために見られることは無かったが蛭子は眉を顰めた。こんなに疲れるのは理由がある。日常生活つまり日本で蛭子はあまり歩いたことが無かった。せいぜい歩くといっても家から学校までの距離、それも短い距離。だけど、ここに来てからは移動手段と言えば歩きか馬、馬は無くしてしまっただけ歩くしかない。

けれど痛い、きつと豆ができているだろう。初めて出来たに違いない。初めてのことに、どきりと興奮したが如何せん今は不味い。

つま先しか見ていなかったが前から声がかかると蛭子は顔を上げてルシオールを見ると、どうやら2人が休む場所を見つけたらしい。またルシオールが生で食べられる食材を探しに行ったのを見計らって蛭子は靴を脱いだ。靴と言っても蛭子が普段履いているような、しっかりとした靴ではなく足袋のように足を覆うようなものだ。そのため直に土を踏んでいるような感触がして更に疲れがつのる。

脱いだ途端に指の付け根に痛み走る。足の裏を確かめると親指の爪ほどの大きさの皮膚が円形に白く浮き上がっていた。おそろおそろ手を伸ばしてマメに触れる。触った途端に経験したこのない痺れが広がった。

これは酷い、けれども早く進みたい。足は限界だが身体が動かないわけではないのだ。嫌な焦燥感が身を焦がす。早く進みたいのに身体は正直だ。

早く進むためにはこれは黙っていないといけない。優しい彼のこ

とだ、これを見つけたらきつとペースを落として私のことを慮ってくれるに違いない。

絶対に言えない。

頑固な決意を胸に帰ってきたルシオールに笑みを向けて食べ物を取ってきてくれたことをねぎらった。

地の世界(15)(後書き)

YES 頑固!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0801p/>

天と地の境界線

2011年11月6日13時04分発行